三重物女讀本

特259
937

始

特259
937

二年生の女子讀本

東京慈恵醫院行啓

昭憲皇太后宮夙ニ御心ヲ慈恵救濟ノ事ニ注ガセラレシガ、明治二十年四月、令旨ヲ賜ヒテ有志共立病院ヲ東京慈恵醫院ト改稱シ、以テ眷護ノ下ニ置キ、五月九日之ニ臨ミテ、親シク開院ノ典ヲ擧ゲサセラレ、式終リテ各病室御巡覽ノ後、還御アラセラル。

爾來年々内帑ノ金ヲ賜ヒ、又冬時患者ノ爲ニ被服ヲ給シ、且毎歲必ズ臨御シテ患者ヲ慰問シ、特ニ年少患者ニハ玩具菓子ノ類ヲ賜ヒテ之ヲ慰メタマフ等、恩恤至ラザルナカリキ。

而シテ御在世ノ間此ニ行啓アラセラレシコト、之ヲ以テ初ト爲シ、前後實ニ二十五回ノ多キニ及ベリ。

圖ハ、明治二十年五月九日、昭憲皇太后宮東京慈恵醫院開院式ニ臨御、式終リテ、病室ヲ巡リ、親シク患者ヲ慰問シタマフノ光景ナリ。

天壤無窮の神勅

豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮りなかるべし。

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

戊申詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尚淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

抑〻我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

國民精神作興ニ關スル詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ揭ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勤メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ詔述ヲ思ヒシニ

俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萠シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ益進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ

保チ責任ヲ重シ節制ヲ尚ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌〻國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

支那事變一周年ニ賜ハリタル勅語

今次事變ノ勃發以來茲ニ一年朕ガ勇武ナル將兵果敢力闘戰局其ノ歩ヲ進メ朕ガ忠良ナル臣民協心戮力銃後其ノ備ヲ固クセルハ朕ノ深ク嘉尚スル所ナリ

惟フニ今ニシテ積年ノ禍根ヲ斷ツニ非ズムバ東亞ノ安定永久ニ得テ望ムベカラズ日支ノ提携ヲ堅クシ以テ共榮ノ實ヲ擧グルハ是レ洵ニ世界平和ノ確立ニ寄與スル所以ナリ

官民愈〻其ノ本分ヲ盡シ艱難ヲ排シ困苦ニ堪ヘ益〻國家ノ總力ヲ擧ゲテ此ノ世局ニ處シ速ニ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ期セヨ

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ鬱フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

御製

ふる雪にこころきよめて安らけき世をこそいのれ神のひろまへ

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

紀の國のしほのみさきにたちよりて沖にたなびく雲をみるかな

みゆきふる畑のむぎふにおり立ちていそしむ民をおもひこそやれ

靜かなる神のみそのの朝ぼらけ世のありさまもかかれとぞおもふ

皇后宮御歌

この秋もみのりよからむをやまだのさとましろにぞゆきのふりける

五十鈴川きよきながれをむすびつつみくにのさちをいのる朝かな

やすらかにねむれとぞ思ふ君の爲いのちささげしますらをのとも

なぐさめむ言の葉もがなたたかひのにはをしのびてすぐすやからを

あめつちの神も守りませいたづきにいたてになやむますらをの身を

大正天皇御製

たひらかに年波かへる五十鈴川かみのめぐみの深さをぞくむ

さくすずのいすずのみやにしげりあひてたてる神杉いくよへぬらむ

としどしにわが日の本のさかゆくもいそしむ民のあればなりけり

雪白きふじのたかねのみゆるかなかしこどころの松のこずゑに

つるぎたちいよよとぐべし外國のいくさの様をきくにつけても

皇太后宮御歌

あまのとはのどかにあけてかみぢやま杉のあをばにひかげさす見ゆ

神風の伊勢のはまをぎまねかねどしたひよるらしよもの國々

あかつきのきよきこころに仰ぐかなあさくま山のみねの白雲

うつぶして匂ふ春野の花すみれ人の心にうつしてしがな

里人のいさみきほひて新米を納めしくらにゆきぞつもれる

明治天皇御製

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

をしへある庭にさきたる撫子の花は露にもみだれざりけり

器にはしたがひながらいはがねもとほすは水のちからなりけり

神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物の始にぞきく

世の爲にもの思ふ時は庭にさく花も心にとまらざりけり

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の國をたもたむ

ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ

はからずも夜をふかしけりくにのため命をすてし人をかぞへて

ちかゝらばわが庭ざくら北支那のたむろに折りてやらましものを

なよたけはすなほならなむうつせみの世にぬけいでむ力ありとも

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな

靖國のやしろにいつくかゞみこそやまと心のひかりなりけれ

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

ならび行く人にはよしやおくるともたゞしき道をふみなたがへそ

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり

をちこちにわかれすみても國を思ふ人の心ぞひとつなりける

わが國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

まごゝろをこめてならひし業のみは年を經れどもわすれざりけり

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ

心からそこなふことのなくもがな親のかたみと思ふべき身を

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

昭憲皇太后御歌

鳥羽の海の波風いかでさわぐらむなみ〳〵ならぬみゆきとおもふに

おこたりて磨かざりせば光ある玉も瓦にひとしからまし

むらぎものこゝろにとひてはぢざらばよの人言はいかにありとも

神風の伊勢の内外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかな

山をなすかばねふみこえ御軍のかちどきあぐるもろこしが原

にぎはへる民のかまどの朝けぶり御心やすくみそなはすらし

朝ごとにむかふ鏡のくもりなくあらまほしきは心なりけり

手すさびにすみれの花をつみてけりをさな心のなほうせずして

一すぢのその絲ぐちもたがふればもつれ〳〵てとくよしぞなき

國のためいたでをおひし軍人杖をちからに歩むかなしさ

何事も皆うちすてゝ戰の道にこゝろをつくすもろ人

身におひしいたでもいえてつはものゝ杖もつかぬを見るぞうれしき

神垣に涙たむけてをがむらしかへるをまちし親も妻子も

いかにして日を送るらむ國の爲身をそこなひしますらをのとも

うるはしき君がみけしきをろがみて心やすくもなれる今日かな

しろしめす國ひろまれどみめぐみの露にはもるゝ民草もなし

天つ神しろしめすらむまめやかに君につかふるおみのこゝろは

天つ日のてらすが如く隈なきはすめらみくにの光なりけり

金剛石

金剛石も　みがゝずば
珠のひかりは　そはざらむ
人もまなびて　のちにこそ
まことの徳は　あらはるれ
時計のはりの　たえまなく
めぐるがごとく　時のまの
日かげをしみて　はげみなば
いかなるわざか　ならざらむ

水は器

水はうつはに　したがひて
そのさま〳〵に　なりぬなり
人はまじはる　友により
よきにあしきに　うつるなり
おのれにまさる　よき友を
えらびもとめて　もろともに
こゝろの駒に　むちうちて
まなびの道に　すゝめかし

十二徳御歌

節制

花の春もみぢの秋のさかづきもほど〳〵にこそくまゝほしけれ

清潔

しろたへの衣のちりは拂へどもうきは心のくもりなりけり

勤勞

みがゝずば玉の光はいでざらむ人のこゝろもかくこそあるらし

沈默

すぎたるは及ばざりけりかりそめの言葉もあだにちらさゞらなむ

確志

人ごゝろかゝらましかば白玉のまたまは火にもやかれざりけり

誠實

とりぐにつくるかざしの花もあれど匂ふこゝろのうるはしきかな

溫和

みだるべきをりをばおきて花櫻まづゑむほどをならひてしがな

謙遜

高山のかげをうつしてゆく水のひきゝにつくを心ともがな

順序

おくふかき道もきはめむものごとの本末をだにたがへざりせば

節儉

呉竹のほどよきふしをたがへずば末葉の露もみだれざらまし

寧靜

いかさまに身はくだくともむらぎもの心はゆたにあるべかりけり

公　義

國民をすくはむ道も近きよりおし及ぼさむ遠きさかひに

孝明天皇御製

朝ゆふに民安かれとおもふ身のこころにかかる異くにのふね

打なびく柳のいとのすなほなる姿にならへ人の心は

いせの海やさゆる波間の月影に所なれつゝ千鳥なくらむ

聖なるふみのおきてを守るならばくだくだし世の事はあらじを

いとざくらいとくりかへし世を思ふ心の花はうつろひもせじ

英照皇太后御歌

つくりなす瀧にはあらでおもしろくおのれと落つる音のすゞしき

たちかへるとしの光をためしにて道あきらけき國はうどかじ

後鳥羽天皇御製

盡きもせず都の空に吹き通へ神路の山の千世の春風

神風やいせの濱邊の曙にかすみ吹きよる浦の初風

秋の空長閑けき波に月冴えて神風寒し伊勢の濱荻

後醍醐天皇御製

照し見よみもすそ川にすむ月も濁らぬ浪のそこの心を

後醍醐天皇皇女祥子内親王御歌

五十鈴川たのむ心は濁らぬをなど渡る瀬のなほ淀むらむ

三重婦女讀本　目次

天壤無窮の神勅
教育ニ關スル勅語
戊申詔書
國民精神作興ニ關スル詔書
支那事變一周年ニ賜ハリタル勅語
青少年學徒ニ賜ハリタル勅語
御製と御歌

禁庭の野分〔昭憲皇太后御作〕……一
皇后陛下の御幼時……四
皇后陛下の御事……一一
皇太后陛下の御事……一七
伊勢離宮地に永遠の榮光……二三
天照大神……二七
伊勢參宮……三二
愛の神の高き御姿……三五
明治神宮に詣でて……四一
橿原宮奠都の詔……四七
橿原宮奠都の詔について……四九
倭姫命……五二

弟橘媛……五七
靜寛院宮……六四
日章旗……七二
日本書紀通證より……七八
谷川士清の歌……七九
神のめぐみ……八〇
本居宣長の歌……八二
明淨直……八三
日本精神……九一
日本民族の覺悟……九九
楠公夫人……一〇七
野村望東尼……一一四

老女村岡……一三八
甲冑堂……一三七
富田信高の室……一四〇
細川忠興の夫人……一四五
山内一豐の妻……一五〇
木村重成の妻……一五三
德川光友の室……一五七
春日局……一六一
瀧鶴臺の妻……一七三
安井夫人……一七六
稻生恒軒の妻……一九四
梅田雲濱の妻……一九七

川瀨幸……二〇二
稅所敦子……二〇四
乃木大將の夫人……二〇九
杉野兵曹長の妻……二一〇
息女に教訓す……二一五
婦人の內助……二二九
日本の家庭と西洋の家庭……二四四
樂しき家風……二五〇
松下禪尼……二五四
原惣右衞門の母……二五六
本居宣長の母……二六一
中江藤樹の母……二六七

賴山陽の母……二七七
橋本左内の母……二八八
黑井繁乃……二九三
東郷元帥の母……二九九
孟母……三〇八
母の教訓……三〇九
母の感化……三一二
兵士の母……三一六
繼母のなさけ……三一三
母性愛……三一五
久遠の母性……三一九
巡禮唄……三二八

母を故國に省みて……三四五
妹千代に與ふ……三五四
太田垣蓮月……三六一
奥村五百子……三六九
佐藤つる……三七三
東西の武士道と婦人……三七七
感想三題……三八一
家庭に於ける禮讓……三八四
婦人の教養としての國文學……三八九
心のお化粧……四〇〇
婦人の愛……四〇四
日本の女性……四一一

目次

わが國の女性と海外發展……四一七
現代女流歌人の歌……四一五
日本女性の詩二篇……四一六
菊盛……四二〇
千代女の俳句……四二一
川柳……四二三
三重采女……四二四
飯高諸高……四二八
伊勢大輔の歌……四二九
慶光院の神忠……四四〇
芭蕉の文並に俳句……四四六
度會園女の俳句……四四八

目次

さつ女……四四九
山田利登……四五一
清水こと女……四五三
加兵衛後家ゑん……四五五
孝女登勢……四五七
荒木田麗の文並に歌……四六一
大野ゑずゑ……四六三
志摩の女……四六九
安乘の稚兒……四七四
雙殉行……四七七
梅溪游記……四七九

……（終）……

禁庭の野分

〔昭憲皇太后御作〕

朝露のひるまはさしもなかりしそらの、俄にかきくもり、夕づゝの光もみえず。とかくするほどに、雨いたく降りいでゝ、ほとり近くかたりあふ人の聲だにきゝわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は、なほ雨のおとのみきこえしを、夜ふかくなるまゝに、雷さへ鳴りはたゝきて、夢現とも思ひ定むるひまなく、稲妻のきらめきわたる、いとけうとし。あかつきがたには雨はをやみぬれど、風はげしうふきいでゝ、宮のうちもゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。

上には、民のためとてかしこくも遠き境にいでましたるほどなれば、いかなる

行宮にまし〳〵て、この風の音に御心をなやましたまふらむ。

皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも、おどろきやしたまふらむと思ひつゞくるほどに、夜も明けぬれど、いまだ風靜まらで、いづこもおろしこめたる、いとものむづかし。

軒近き栗の枝の、むすべる實ながら吹折らるゝおといと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井のかたはらなる柳も、皆をれふしぬ。今を盛と見えし眞萩も、名殘なくちりみだれたる、いとさびしく見ゆ。宮のうちだにかくあれぬるを、ましてあやしげなるしづが家居などは、倒れぬるも多からむなど思ひやれば、すゞろに悲し。おしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻も、ふきそこなはれつらむやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神もこゝろしていな葉のうへはよきて吹かなむ

なほとやかくとむねをいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさしいでぬるに、おのづから人のこゝろもおちゐにけり。

民のため世の爲祈る神わざのしげき御國は猶ぞ榮えむ
是や此の天照る神の天地を守るしるしの千木のかたそぎ
君が代を祈る心の誠をばいつはりなしと神やうくらむ

檜垣常昌

皇后陛下の御幼時

恐れ多いことでございますが、私は嘗て皇后陛下の女子學習院御在學中御奉仕申し上げましたので、當時の事を想ひ起して、こゝに御學習の御模樣その他につき一つ二つ御話し申し上げようと存じます。

陛下御幼少の折は女子學習院の幼稚園へ折節御通ひ遊ばされ、明治四十二年四月から同院初等科へ、大正四年三月御卒業、直に中等科に御進み遊ばされ、同七年二月中等科第三學年を御修了のすこし前に御退學遊ばされたので、女子學習院には十一年の間御在學遊ばされたわけでございます。そのころは、女子學習院は學習院女學部と申しまして、院長はあの謹嚴な乃木大將で一體の學風が極めて堅實な、寧ろ地味一點張と申してよいくらゐでありました。世間で想像するやうな、華美とか贅澤とかいふやうなことは見ようとしても見られませんでした。陛下にはこの學風のなかに御修學遊ばされたので、一面には久邇宮樣の御家風と相俟つて、すべてが御質素で、御堅實で、一般學生に活きた好い模範をお示し下さつたのでございます。日常の御學用品や、御携帶品や、御手廻りの御品なども少しも他の學生とおかはりなく、むしろ一般學生よりも一層御質素なくらゐであらせられました。御學用品を少しも無駄には遊ばされず、わづか紙一枚でも粗末に御扱ひになつたことはございません、御書損じの日本紙などは必ず御保存になつて、後日何かの御用に御立て遊ばすやうな次第でありました。

陛下の御修學ぶりは、實に一般學生の模範でおありなさいました。何の學科もよく御勉强遊ばし、日毎々々の御日課の如きも御豫習や御復習は十分なさいますし、宿題などもたゞの一度でも期日にお後れ遊ばすやうなことは決しておありなさらなかつたのであります。私は修身科を擔當して居りましたので、時としては

學級全體のものに對して何かと小言を申したこともありましたが、その時陛下の御樣子を御窺ひ申しますと、まるで陛下御自身の御事でもおありのやうに御聽取り遊ばすのを御見受け申しますので、そのため一般學生への小言も幾度控へたかわかりません。

當時、陛下の御學級はなか〳〵優れた御孃樣揃で、頭のよい方、手先のきく方、元氣のよい方、才氣の勝つた方、又はごくおとなしいしとやかな方など、それ〴〵特色をもつた學生が澤山居りました。小學科御在學の時代は主に寺島芳榮といふ人の擔任でありました。この人は今は亡くなりましたが、學生の教育には力の限りを盡くし、一人一人の持ちまへの性質を傷つけずに、春の草木の伸びゆく如く自然に伸びゆくやうに、といふことを主義として育てたからでもありませうが、その頃のこの學級は學校全體から特に注目されて、行末頼もしいことと大いに望を屬せられたものでありました。さうして陛下はこの中におはしまして、御學問も

御技藝もすべてに渉つて、いつも他の學生に拔きんでて御成績優等にあらせられ、全學級のものから常に尊敬と嘆美とをお受けになつていらせられたのであります。

申すも恐れ多いことでございますが、陛下は實にはつきりとした明敏な理智の力をお具へ遊ばし、どのやうなむづかしいことでも十分おわかりになりますし、又おわかりになるまでは決して御研究をお止め遊ばしません。御言葉や御文章におあらはしになるのでも、まことに簡潔で、まことに正確で、一語も一句も疎かに遊ばしません。それは御苦心、御修養の結果かもわかりませんが、外から拜しては少しもさうは見受けられませんでした。私どもは毎々驚の眼を以て一般學生の及びもつかぬことを蔭ながら讃嘆し奉つたことでありました。或時の試驗に、陛下は用紙をお机の上に置かせられたまゝ御筆をお執りになりませんので、さてはこの問題が流石に御難解でいらせられるのか知らんとおもつて、時計を見ると、

もう時間は三十分餘も經つて居ります。それでも泰然としていらせられます。どう遊ばすことかと御案じ申し上げて居りますと、やがて御筆を御執りになるが早いか、ほんのしばらくの間に御答案はすつかり御出來になりました。そしてその御答案は簡明で而も要領を得、條理が整然として、實に立派な御成績に拜しました。つまり前の半時間は十分に御心を靜めて御考へ遊ばしたので、多くの學生のやうに、あとさきの考もなく只いち早く筆を執つてむやみに書急ぐのとは、大變な相違のおありなことをつくづく感じたことでありました。

さてまた陛下の御淑德は圓滿和平とも申し上げませうか、いつも御微笑を含ませられ、ゆつたりと御落ちつきの中にいとも優しい閑雅な御態度でおいで遊ばされました。私どもはあの永い年月の間に御氣色のおかはりを一度でも拜し奉つたことはありません。平生ごく御言葉少にいらせられますが、人の話は喜んで御聽取り遊ばし、どんな事でも御耳をお假しになるのが常でありました。それゆゑ同級

生などは、何でも珍しいことがあれば直に陛下に申し上げるのを樂しみにして居つたのであります。陛下がたまに何かの御都合で御缺席遊ばすやうなことがありますと、他の學生は何となく氣ぬけがしたやうに寂しい一日を過したのでありました。陛下はそのころ御妹君の信子女王殿下や智子女王殿下と御一緒に人力車で御通ひ遊ばしたのですが、御缺席の翌日などは早朝から學生が校門に集つて、三臺の人力車が續いて來られるかどうかと、固唾を呑んで迎へて居るのを見たものであります。すべてに於て學生全體の敬慕の的であらせられたのであります。而もそこに少しの御無理もなく、わざとらしい所はなく、たゞ御淑德の自然の發露であらせられたのでございます。御友だちを特に御擇び遊ばすといふことはなさらず、誰彼の差別なく皆御親しみになり、又御妹君を始め下級の學生等に特に御慈しみを垂れさせられることは、はたから拜しても如何にも溫い感じがいたしました。御明敏におはしながら、決して他の人を御批評なさることはおありなさ

いませんでした。さながら春の彌生の麗かな日かげの如く、何とも申し上げやうのない御親しみのある、お懐かしみのある御態度であらせられました。實に陛下は一視同仁、威あつて猛からず、初から萬民の上に立たせられる御坤德をお具へになつて御生まれ遊ばしたかのやうに拜し奉られるのであります。

（馬上孝太郎）

皇后陛下の御事

皇后陛下は故久邇宮邦彥王殿下の第一王女にまし〳〵、明治三十六年三月六日御生誕あそばされました。さうして、同四十年九月、御年五歲で學習院女學部幼稚園に御入園あそばされ、同四十二年四月、御年七歲で同學部初等科に御入學あそばされました。陛下は幼時から御體格が勝れていらせられ、御發育も御良好に渡らせられ、また衆に秀でた御氣品をお備へになつていらせられました。

大正四年三月初等科六箇年の課程を御卒業あそばされ、其の四月中等科に御入學になつて、所定の課程を御勉强あそばされていらせられましたが、第三學年御在學中の大正七年一月十一日、皇太子妃殿下に册立あそばされる御豫定になりましたので、學習院を御退學になつて、其の四月から久邇宮家御邸内に新設された

御學問所で、高等普通の諸學科をそれ〴〵御擔任教師に就いて御修學あそばされ、また臨時に、美術史・文學史・社會事業・陸軍・海軍に關する講義を御聽聞あそばされ、なほ時々著名の學者または實務家を召して、其の專門とする事項に就いて講義を御聽聞あそばされ、絶えず御勉學・御修養にお心をお注ぎになつていらせられました。

陛下は御修學中は必ず定刻に御學問所にお出ましになつて、御課程にいそしませられ、殊にお氣附の事項については、周到な御注意を以て、一々詳にノートにお書留になり、御會得になり兼ねる事項は、どこまでも御質問をお重ねになつて、徹底的に御學習あそばされるのが例でありました。

大正八年六月十日、いよ〴〵皇太子妃册立の御事が御治定になり、大正十一年六月二十日、時の天皇即ち大正天皇の御勅許があり、其の後御成婚の御日取も略、大正十二年十一月頃と御内定になりました。ところが其の十二年の九月一日に、突如として關東地方に大地震が起り、同時に、東京・横濱などに大火事が起り、其の禍害が甚大でありましたので、畏くも皇太子殿下即ち現在の天皇陛下の思召によつて、一時御擧式を御延期になり、越えて大正十三年一月二十六日、目出たく御成婚あそばされました。

陛下は御入輿後も御熱心に御勉學・御修養をお續けになり、國文・漢文・佛語・英語・繪畫・ピヤノ・ヴァイオリンなどをそれぞれ其の道の大家に就いて御研究あそばされました。

陛下は學習院女學部御通學中から和歌をお學びになり、大層御堪能に渡らせられます。次に御成婚前並に御成婚後の御歌の二三を奉掲しませう。

若　菜〔御成婚前御作〕

枯草のひまに生ひたる初若菜摘みてさゝげむ神の御前に。

まこと〔同前〕

いかばかり身はひきくとも眞心をたもたむ人ぞたふとかるべき。

折にふれて〔同前〕

温かにふせるも苦しふすまなきかりやの人を思ひ出づれば。

山色連天〔皇太子妃時代御作〕

初日の出をろがみ終へて顧みる空につゞけり不盡の高嶺は。

河水清〔同前〕

水底のさゞれの數もよむばかり河のながれの清くもあるかな。

陛下は御幼時から敬神の念に富んでいらせられます。御成婚前には、毎朝必ず先づ久邇宮邸の後苑の淨域にある靈殿に御參拜あそばされ、五月雨の降り續く初夏の鬱陶しい朝も、お庭の飛石が白雪に埋れる嚴寒の旦も、嘗て一度もお怠りになつたことはありませんでした。

陛下は御健康も殊にお勝れあそばされ、運動・遊戯をお好みになつて、以前は

御學友をお相手に庭球にお興じあそばされました。また植物を御愛好になつて、春秋時々の草花を御自ら花壇に御培養あそばされ、日毎に水を灌いで、其の生立つのをお樂しみになりました。更に農事の御研究にもお心をお注ぎになり、御邸内に數坪の田畑を設けさせられて、稻・麥・綿・南京豆などをお植ゑあそばされ、米の收穫期には召使と共に御自らお刈入れになりました。

陛下が仁慈のお心に富んでいらせられることは、世人の普く知るところでありますが、嘗て御學問所御用係の杉浦重剛翁が、病氣のため御進講の任を拜辭し奉つた時、「寒さの砌に起居は如何か。」と、老體の上をお心にお掛けあそばされ、桃の節句の日が恰も翁の誕生日であることを聞召され、御自らお筆をお執りになり、雛人形を繪絹にお書きになつて、病床の翁の徒然をお慰めあそばされたさうであります。また或年の夏、暑氣が劇しかつたので、市中の人々はさぞ暑いことであらうと仰せられ、民衆の上をお案じあそばされた御慈みのお心を拜して、お側近

く奉仕してゐた人々は非常に感激し奉つたと申すことであります。

（新制女子國語讀本）

天の原照る日に近き富士のねに今も神代の雪は殘れり　橘枝直

たたなづく青山の秀に朝日子の美のひかりはさしそめにけり　齋藤茂吉

皇太后陛下の御事

皇太后陛下が古來稀に見る聰明なお方でいらせられる事は、今更新しく述べるまでもない。私たちは此の陛下を國母として戴いて居るのを、無上の光榮と思うて居る。

大正十二年の夏、皇太后陛下は先帝陛下と共に日光御用邸に御滯在中であつたが、宮内省から九月一日の關東地方大震火災の情報を受けさせられて、一方ならず御憂慮あそばされ、同月二十五日、後藤内相が御用邸に伺候して、帝都に於ける災禍の模樣及び罹災者の狀態などを詳細に言上したところ、陛下には御熱心に御傾聽なされて後、「自分等も一汁一菜で凌ぐゆゑ、國民も節約を旨とし、殊に其の向〳〵の官吏は徹底的に罹災者の救護に努め、帝都の復興に盡力して貰ひたい。」

といふ意味のお言葉を賜はつたので、内相も陛下の御仁慈の深いのに感激して退下したといふ。

さて皇太后陛下には、同月二十九日、俄に焦土と化した帝都に還啓なさる旨を仰出され、バラック建の假上野驛に御到著あそばされるや、直ちに上野公園自治館内の罹災者を御慰問なされ、なほ宮内省巡回病院・三井慈善病院にも行啓なされて、親しく傷病者を御慰問あそばされた。さうして、翌三十日及び十月二日には陸軍第一衞戍病院・慶應病院・赤十字病院・青山病院・傳染病研究所・濟生會病院・東京帝國大學病院などに行啓あそばされ、傷病者に優渥なお言葉を賜うた。其の御仁慈のほど、光明皇后の古い例も偲び出されて、誠に有難い次第である。

其の後、再び日光へ行啓なされ、十月十五日改めて先帝陛下と御同列で東京に還啓なされ、本郷臨時病院・深川臨時病院・濟生會病院などに行啓なされて、親しく傷病者を御慰問あそばされた。さうして、十一月二十三日にも、また各所を御慰問なされて後、突然あの最も慘害の甚だしかつた被服廠跡にお立寄の旨を仰出され、永田市長の御案内で、玉歩を納骨堂前にお運びになり、香煙の細く立昇る中に、畏くもお眼を曇らせ給うて、靜かに御默禱なされ、三萬八千の靈を親しく御弔慰あそばされた。地下の靈も定めて感泣した事であらう。

陛下が此の大震火災の慘狀に就いて如何にお心をお痛めあそばされたかは、次の御歌によつても拜察することが出來る。

おほとのを叩く霰の音にしも假屋のよるの寒さをぞ思ふ。

これは、霰が御所の屋根を打つ音が聞える。震災の爲に家を失つて、粗末なバラックに住んで居る人たちは、定めて寒さに震へて居るであらう、氣の毒な事であると、罹災者に對する御憐愍の御情を詠ませられたのである。

陛下には、去る大正十四年五月十日を以て、御成婚滿二十五年に當らせられたので、銀婚の御祝典をお擧げあそばされた。折柄御病氣中の先帝陛下にも、沼津

御用邸から宮城に還幸あそばされ、各皇族殿下をお召しになつて、御内儀に御祝宴を催させられた事は、實に慶賀に堪へない次第であつた。併し、此のお目出たい御祝典に際しても、皇太后陛下には諸事御節約を旨とせられ、一般國民の獻上品をお斷りになつて、「眞心だけで澤山である。」と仰せられたのは、眞に恐懼の至であつた。

此の御祝典後、先帝陛下には御病氣が次第にお惡くならせられた事は、七千萬國民の等しく御憂慮申上げた所であつたが、分けても皇太后陛下の御心勞は拜察するさへ畏れ多いほどで、日夜御看護に御心血をお注ぎになり、御安眠さへなされず、神佛に御祈願をお籠めになつて、ひたすら御病氣の御平癒を禱らせ給うた事はたゞ〳〵感涙の外はない次第であつた。

かやうに皇太后陛下は先帝陛下の御看護にお心をお盡くしなされたが、其のお暇には、外國使臣に謁見を賜はり、天機奉伺の文武大官にも拜謁を仰付けられた。三大節・祝祭日に於ける宮中三殿の御參拜は勿論、新年歌御會始を始め、觀櫻・觀菊の御會、赤十字社並に愛國婦人會の總會、女子學習院の卒業式にも必ず出御あそばされ、其の都度有難い思召を傳へさせられた。

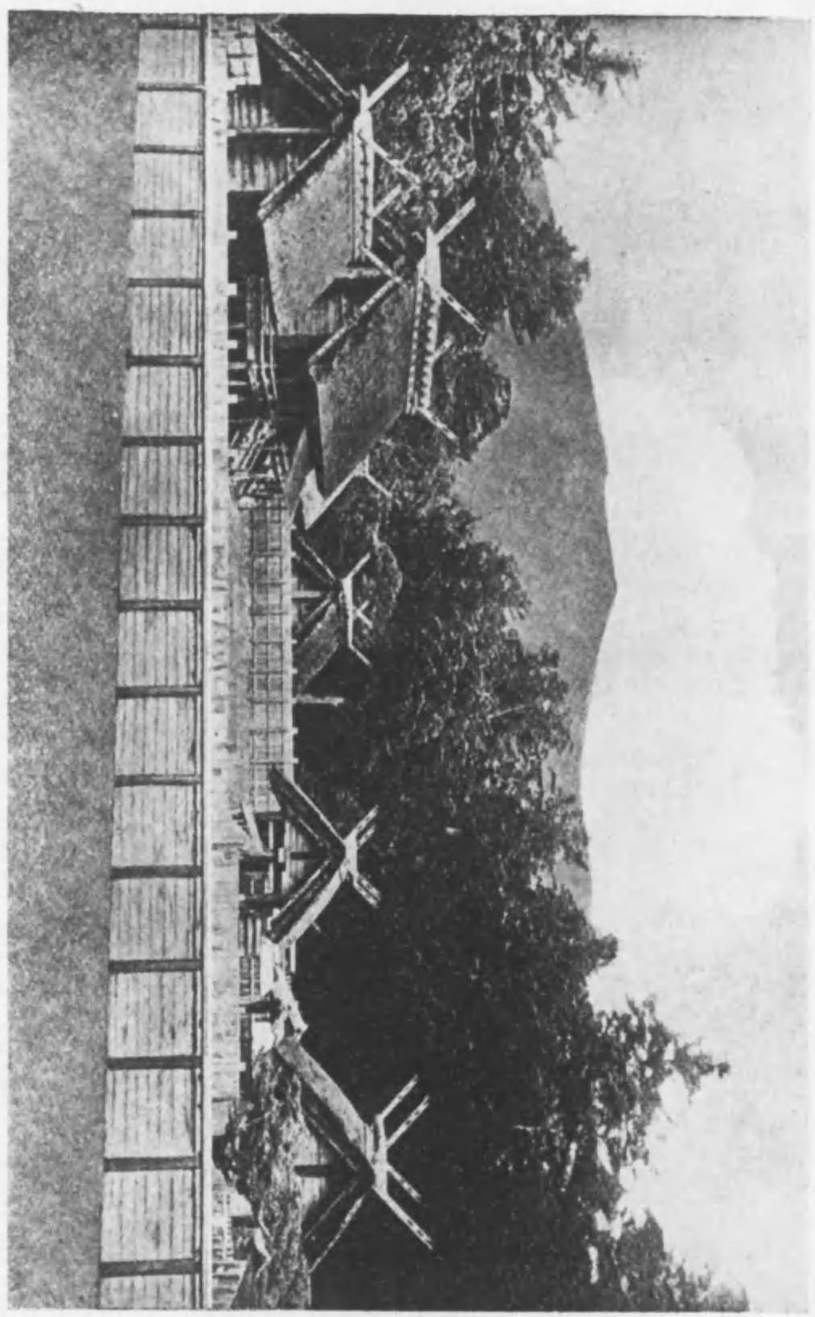
大正十五年八月十日、皇太后陛下は葉山御用邸西附屬邸に御避暑なされ、引續き其處に御滯在中の先帝陛下を、寢食を忘れて御看護あそばされた。それにも拘らず、先帝陛下には十月二十七日頃から御病氣が次第に重らせられ、十二月十七八日頃になつて御容體が急變し、重態に陷らせられた。皇太后陛下には、御痛はしくも此の長い間寸時の御心安めもなされず、畏くも早朝から深更まで、先帝陛下の御病床近くに常侍あそばされて、お心の限を盡くして御看護なされ、殊に御急變後は、御躬ら先帝陛下の御胸・御額のあたりを幾度か純白のガーゼに氷を浸してお冷しになり、絶えず天顏をお見守りあそばされて、御眉一つのお動きにもお心をお碎きなされたと承るさへ、實に恐懼感泣の極みである。

皇太后陛下のお心盡くしの甲斐もなく、先帝陛下には、其の二十五日午前一時二十五分、七千萬國民の身も世もあらぬ悲痛の裡に、哀しくも崩御あそばされた。我等は皇太后陛下の御胸中を拜察して、殆ど言ふ所を知らないのである。

（新制女子國語讀本）

神垣のみむろの榊さしそへて君をときはと猶いのるかな
露ならで玉とぞ見ゆる置霜のこほればうつる淺ぢふの月

村松家行



伊勢離宮地に永遠の榮光

午前十一時劉喨たる喇叭の音のあたりの閑寂を破りて響き渡れば、御車は猛雨を衝いて、肅々として式場に入らせ給ひ、御座所近く御停車あらせらる。此の時陸軍軍樂隊の吹奏する「君が代」の樂の音と共に、陛下にはいと御機嫌御麗しく、設けの御座所に進ませ給ふ。

安藤知事鞠躬如として御前に進み、謹んで「台覽を仰ぎ奉る」旨を言上し、御座所左側に侍立すれば、指揮臺上に立つ岡田樂長の打ち振る日の丸の小旗のタクトにつれて、軍樂隊は「君が代」を奏し、全員これに和し奉る。此の時陛下には畏くも御椅子を離れて御起立あらせられ、端然として民草の獻げ奉る至誠を受け給ふ。

國歌奉唱終るや、岡田樂長の指揮棒、日の丸の小旗はト調四分四拍子に變り、

タクトは動く。今日一日の光榮に感激して、三重縣が謹撰し、乙女等も亦之が練習に精根をつくした「奉迎歌」である。

神路の山の緑濃く
今日のよき日にまのあたり
わが大宮の御光を
つどへる吾等少女子の
仰ぎぞまつるかしこさよ
あゝこの榮
あゝこの譽
永遠にかしこみこたへまつらむ

雨か。あらず、感激に泣く乙女らが涙である。風か。あらず、歡喜に戰く乙女らが胸の高鳴りである。

松の緑、萠える草、見るもの、聞くもの、天地悉くが盛歡盛喜の坩堝である。

奉迎歌は第二章に入つて、壽ぎの聲は一しほ高くあたりの山々に谺する。

御裳濯川の水清く
今日のよき日に聲そへて
わが大宮の御榮を
つどへる吾等少女子の
ことほぎまつるうれしさよ
あゝこの榮
あゝこの譽
こゑ高らかにうたひまつらむ

奉唱歌終れば、やがて軍樂隊の奏する行進曲につれて、晴の團體體操に胸躍らす女學生の一團は、白木綿半袖の運動服に紺のスカート甲斐々々しく、降りしきる雨を衝いて、芝生の中央に行進するよと見れば、忽ちさつと數團の圓を描いて展開する。軍樂隊の奏するは名曲「ドナウ河の漣」。嘹喨たる樂の調べと共に、歡喜に躍る乙女の群は、或は緩く、或は速に、時には輕捷燕の翔るが如く、時には悠揚鶴の舞ふにも似て、進退調べに和し、卷舒律に協ふ。寄せては田毎の月

と照り、開いては月下の波と搖るる。名月波に碎くれば方田忽ち眼下に列なり、方田水に崩るれば名月再び眼前に浮ぶ。長い間の振付練習の努力を此の一刻にかけた「田毎の月」のリズミカルな合同體操に、二百の乙女の血は感激の火と燃えて滿面紅潮に輝き、篠つく猛雨の中に蝶と舞ひ、波と躍る。指揮する縣立津高等女學校教諭水野女史が光榮に輝く瞳、考案振付の東京女子高等師範高校助教授戸倉女子が感激に涙する顏、三千餘名の乙女子は雨も泥濘も、はたと忘れて、ただ陛下の神々しき御姿のみが、まなかひに髣髴する。

陛下には此の十數分間をいと御滿足氣に、御熱心に御覽あり、體操終るや、安藤知事發聲に「皇太后陛下萬歲」を三唱すれば、全員之に唱和して最敬禮を行ふ。やがて知事は再び御前に進み、謹みて行事の終了したる旨を言上する。

陛下には軍樂隊の奏する「君が代」の奏樂裡に全員の奉送を受けさせ給ひ、午前十一時二十八分、御機嫌いと御麗しく還啓あらせられた。（皇太后陛下行啓記）

天照大神

天照大神は、實に我が太古史中の唯一の理想的御神で在したのであります。國民の理想的性格を具備せられ、元首として、無限の信仰を一身に集め給ひしと共に、他方に於て、大神は實に太古に於ける我が國婦人の理想典型で在したものと申さなければなりません。太古史中にも種々な性格を備へた婦人が隨分澤山表れて居りますが、我が天照大神は國民の理想とする婦人性を完全に具備せられた御方と申さなければなりません。されば古代の日本人が如何なる性格を以て婦人の理想としたかを調べてみるには、畏けれども、天照大神の御上について考へてみなければなりません。

まづ、大神は武勇絕倫の御方であらせられました。武勇はこの時代に於ては最

も尊ぶべく、また最も必要なことであつたのは言ふまでもありません。その當時の男神で世に尊ばれて居られた方は、孰れも勇武の神々であつたのをみても解りませう。武甕雷神・經津主神・大國主命・素盞嗚命その他一柱として武勇の神でないのはありません。その頃は實際征服の時代であつて、知識を以て爭ふことは極めて稀で、多くは武力を以て戰つたのでありますから、力の強い人は從つて世の尊敬を受けたのでございます。我が天照大神も女性で在しましたけれども、實に武勇もまた絶倫であらせられたのでございます。御弟素盞嗚命は伊弉諾尊ももて餘し給うた程の亂暴な御方で、御姉大神に逢はうとて、天に上らせ給ふ時には山川悉く震動するといふ有樣でありました。しかも大神は敢へてこの驍勇に恐れず、泰然として正當防禦の位置に御立ちになりました。

ですが、これは一大事に臨ませられた時の御有樣でございます。平時の大神はやはり優美溫和な御女性で、如何にも女らしい御方で在しましたことは、大神が常に御躬ら機殿の中に籠り在して、織り紡ぎの業をいそしみ給うたといふ一事によつても知ることが出來ませう。素盞嗚命が種々なる亂暴をなさるにも御腹立ちなくて、一々それを善意に御解釋なされたところは、如何にも寛大で、慈仁で、優雅高尚な御性格の程は、今から考へても恐れ多い程でございます。また大神の如何に當時の人望を集め盡くしてあらせられたかといふことは、例の天の窟戸開きの傳說が十分にこれを證明するのでございます。

また大神の統御の才に富んで在しましたといふことは、出雲の國讓の一事件をみてもよく知ることが出來ませう。大神にして、天下に君臨し給うて、若しその化育普からず、民の悅服することがなかつたならば、決して大國主命が、經營慘憺、苦心をして拓き治められた土地を天孫に獻上するやうなことはしなかつたであらうと思はれます。

武甕雷神・經津主神はその武勇によつて、よく君命を辱しめなかつたのである

ことは勿論ですが、そのこゝに至らしめた所以のものは、大神の御聖德によることは申すまでもありますまい。また愈、天孫降臨といふに至つて、よく千萬年の後までも洞察し給うて、皇位萬世一系の國體を示させ給うたなどは、幾多東西各種の國々の名君も、なか〳〵思ひ及ばぬことで、よし、また思をこゝに凝らしたにしても、大神のやうな大威德の御方でなければ、よく行はるべきものではありません。

かくの如く、古代我が國婦人の理想的性格は、圓滿完全なる天照大神の上に具備せられて居りますので、さてこそ太古の人々は、大神を以て太陽に在すと言ひ、光明八紘を照らす御德を信仰したのでございます。（下田歌子）

伊勢參宮

俄に參宮を思ひ立つて、きのふの夕八時に東京を立ち、けさ十時に山田に著きました。まづ外宮を拜んで、次に內宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に內宮の畏さは言語につくせません。五十鈴川の淸き流に、水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく口をすゝいで、それから頭上の木の枝に猿の遊ぶのを見、名も知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、綠靑色の苔に寂びた神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立並んでゐる間をたどつて暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に、千木・堅魚木の金色が拜まれます。更に進んで塀の內に入ると、正面の御門には、白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奥に疎らに立つた神杉に護られて、御白石のぎつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の

御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老爺や老婆が、拍手を打つては、溜息まじりに高聲の祈願を繰返すのに聽入りながら、現の間に西行法師が、忝さに涙をこぼして額づいた、敬虔な姿を思ひ浮かべました。

直き清き強き心をあらはしてすく〳〵立てりたふと神杉

神宮は「單純」といふものゝ偉大さを極度に表現したやうに拜まれます。さうしてこの御社の神杉は、樹木の神々しさを極度に表はしたものゝやうに思はれます。

私どもは內宮の御後の神杉の根方から、一片の苔を採つて押戴いて懷にし、御手洗川に口すゝいで、をりしも聞ゆる笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、かへりみ〳〵宇治橋を渡つて昭憲皇太后の愛で聞し召したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて、田圃路の五十九町を志摩境の名山、朝熊山に走らせました。

御社のうしろの御門をろがみてひとかけの苔いたゞき歸る

神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心にかなつた謂れを考へました。

大神宮儀式帳に、

「度會(わたらひ)の國は朝日の來むかふ國、夕日の來むかふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎭ります國と悅び給ひて、大宮定めまつりき。」

とあるのを見れば、第一には、山水の景色のたぐひなきを愛でさせられたのであらう。第二には、地勢・氣候・風土のうるはしきを愛でさせられたのであらう。第三には、この土地に永久な平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう。最後には、一切の消極的煩累に煩はされずして、皇御孫に率ゐられる大和民族の

積極的・光明的發展を見そなはすに都合のよい、氣の落著く境と思はせられたのであらうなどと考へながら、をり〳〵車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつか朝熊山の麓に著きました。（五十嵐　力）

元日や神代のことも思はるゝ　荒木田守武

何の木の花とも知らず匂ひかな　松尾芭蕉

おのづから頭がさがるなり神路山　小林一茶

愛の神の高き御姿

昭憲皇太后様が、どんなに御淑かに、御やさしくましましたかは、とても筆紙では盡くされませぬ。全く日本婦人の鏡であらせられました。勿體ない事でありますが、「此の天皇様にして此の皇后様――よく御揃ひ遊ばしたものよ。」と、私達御側に奉仕するものは、つね〳〵に申し合つて感激したことで御座います。威しく雄々しき聖上と、御淑かに、御愼ましく、さうして、御溫（おんあたか）に御內助遊ばされた皇太后様こそは全く愛の神様、その儘であらせられました。

議會開會前とか、或は政變の場合など、聖上が表の御用多くして、御晝の入御が御遲くなられます時などは、私共が御晝の御膳を持ちましても、皇后様は「聖上（おかみ）が御國のためにおつとめ遊ばすのに、どうしてわたしが。」と仰せになつて、決して

御許しなく、たとへ三時が四時になりましても、聖上の入御になるまでは、きちんと御正座遊ばされ、聖上の御身の上や御國のことを神々に御祈念なされつゝ、御待ち遊ばされます。さうして聖上入御の後、始めて御一緒に御膳に御つき遊ばすのが常で御座いました。

聖上が萬事御質素に遊ばされ、御製を奏上袋に御認め遊ばしたと同じ樣に、皇后樣にもよく聖上の御心を體されまして、時折の御歌を御認め遊ばすにも、決して直ぐと紙に御認めになるやうなことは御座いません。御下書は必ず御懸硯の御蓋に態々造らせられた紙石盤に御認めになり、何度も御氣に召さぬ所は御修正の上、始めて料紙に御認め遊ばされました。

一事が萬事、凡てを聖上の御心と共に遊ばされたのは、畏れながら「夫唱婦隨」の模範を垂れさせられたものと拜します。

國產奬勵の御趣旨によつて、日常の御用度品は申すに及ばず、私たち女官の服地までにも絶えず御注意を賜はりました。

明治二十七年三月九日、御成婚二十五年の御祝典について、私達は京都川島織物會社製の御服地を拜領致しましたが、その節香川皇后宮大夫を經て、左の如き御沙汰書を賜りました。

「婦女服制の儀に付、去る明治二十年一月十七日、

皇后陛下より賜はりし思召書の御趣意は、專ら我が國產の織物を用ひ美術の進歩を御奬勵被爲遊度御思召の處、年月を經るに隨ひ、自然と等閑に相成候傾き有之、昨今の景況にては、本邦製の織物を用ふる者日を追うて減少し、隨つて右織物工業衰微の狀を來し、誠に我が國の經濟に取つて得策にあらざるは論を俟たざる儀に付、此の際斯の弊を剪除して挽回せざるべからず。就いては先年賜はりし思召書の御趣意をよく〳〵奉體し、服地を始め、其の他附屬品に至るまで、成る丈け國產を用ひ候樣致し度思召に候。且又新奇美麗を好み、時々の流行を逐ふは、人情

の制し難き所よりして、殊更に異様の裁縫を好み、底止する所を知らざるに至るべきを、是又深く御憂慮被爲遊候に付、質素實用を旨とし、流行に走らず、精々國産を用ひ候樣、猶又厚く思召候旨御沙汰候事」

これを拜讀するもの、誰かこの有難き思召に感佩せずに居られませう。誠に畏れ多いことでございます。

もろこしの畑のたかきびふく風に霜ちるよはの寒さをぞ思ふ

國のためいたでおふ身のうつしゑはみるに涙ぞもよほされける

暑きにつけ、寒きにつけ、民草の上を御心づかひ遊ばすことは皇后樣とて、聖上とお變りはございませぬ。殊に戰爭中などは、戰地にある兵士の上を深く御心配遊ばされ、傷病兵のためには御躬ら繃帶卷までも遊ばされました。

樹下範子樣などの御話を承りますと、西南の役頃には、まだ繃帶がなく、石炭酸をしめして傷口に當てる綿撒絲を、皇后樣御指圖の下に御內儀で造られたさうで御座います。日淸日露の兩役には、私も御側に奉仕いたしましたから、親しく御手傳ひ申し上げるの光榮を得ました。御內儀の一室を消毒の上、皇后樣始め女孺の人まで、同じ手術衣のやうな上衣を著し、昇汞水で手を淸めつゝ繃帶卷を致しました。朝の間は神佛の御祈念や、外人との御交際で、なか〳〵御忙しういらせられます。然るにそのお疲れの御身を以て、殊にあのお弱い御體にも拘らせられず、毎日午後一時頃から、夜分御格子前まで、御卓の傍に繃帶卷の器械をお置きになり、御一心に、御國のために傷ついた人を憐みて、孜々として御つとめ遊ばされました。

今靜かに眼を閉ぢて當時を回想いたしますと、皇后樣の繃帶卷を遊ばされる氣高い御姿が目の前に浮んで參ります。されば私達も一心不亂、布をさく人、卷く人、包む人、ペーパー張る人、各〻分業にして、御部屋の中は一時はまるで工場のやうな騷ぎでございました。又時折は、侍醫寮から高階、桂などいふ侍醫の方

々が見えられまして、負傷者の手當などについての講話も御座いました。

衞戍病院へ御見舞の御供を致しました時、負傷者の一人々々の寢臺の傍まで御進み遊ばされ、殊に重傷者に對しては、畏くも御涙さへ浮べさせられた御心を拜しまして、實に勿體ないほど有難く存じました。痛手に苦しむ人々も、御情深い國母陛下の御沙汰を、耳近く大夫から傳へられた時には、どんなにか感激に胸せまつたことで御座いませう。

御英邁なる明治大帝、御淑德高き昭憲皇太后、揃ひも揃ひ給うて、恰も天の日月の如く、その光は長へに國民の仰ぎ慕うて已まぬ所、まして御側近く奉仕した私に取つては、宛らの神そのまゝでいらせられます。偲べども偲べども盡くることなき感激の源でいらせられます。（樹下定江）

明治神宮に詣でて

朝早く明治神宮の森に入つて、感じのよい白砂の敷詰められた參道に立つと、もうそれだけで胸の底まで清められて、晴々とした明るい心持になります。東京にも神社は數多くありますが、このお宮の森程、神域といふ感じの深い所は外に餘りないでせう。

神宮橋を渡つて一の鳥居をくゞり、兩側の森の綠濃い美しい玉砂利道を、大鳥居のあたりまで來ると、何だか山の社へでも來たやうで、東京にゐる氣がしないとは誰でもよく言ふことですが、實際此所へは近代的な都會の騷音も、埃つぽい空氣もはいつては來ません。神の森が、あらゆる汚を濾過して淨めるのです。聞くところによりますと、明治神宮が造營されるまでのこの邊は、疎らな雜木林と竹

藪と、わづかな耕地とが見られただけだつたさうですが、それが今のやうなりつばな森になつたのは、皆この神宮の祭神であらせられる明治天皇昭憲皇太后御二柱の御德の力と、それを崇仰し奉る國民の熱誠の力とによるのです。內苑を形作つてゐる神木の殆ど全部は、各地の人民から獻納したもので、中には村全體の者が總がかりで、はる〳〵運びこんで來たのも少くないとの事です。またお宮の造營に就いても、各地の青年團員が交代で出て來て、泥と汗とにまみれながら、熱心に奉仕したと言ひます。そして、それも誰に勸められたからといふのではなく、皆明治天皇と昭憲皇太后とのお宮の造營に、自分も何かのお役を勤めたいといふ誠心誠意から出た事なのです。これは日光東照宮の造營に就いての諸大名の寄附が、半ばまで暗默の强制に基づいてゐたのとは大變な相違です。私は阿里山の大檜で造られた大鳥居をくゞつて、玉垣鳥居の前へ行くまで、いろ〳〵と考へ續けてゐました。清冽な御手洗の水で手を洗ひ、口を漱いで廣前に立つと、全く改つた肅然たる心持になります。跪いて默禱してゐると、拍手する刹那に合せた兩手が强い感激にふるへるのを感じます。光輝ある明治時代の文化をお開きになつた當時の天皇皇后兩陛下は、神となつて今も御本殿の奥深くおはしますのです。兩御祭神のうちでも殊に昭憲皇太后は、この代々木の自然がお好きで、ちやうど今、參道の兩側に分れて殘つてゐる舊御苑へ屢〻行啓あそばして、武藏野の面影をしのばせる林中の御逍遙や、舟遊、釣魚などを、この上もなくお樂しみになつたと承つてゐますが、當時御休憩になつた御殿や、御茶屋、御遺愛の菖蒲田などが、そのまゝ保存されて、毎年一定の時期には拜觀が許されるさうです。

私はこの思出の多い代々木の土地に、昭憲皇太后の御神靈が、明治天皇の御神靈と並ばせ給うてお鎭まりになつてゐる事を嬉しく思ひます。

我が國には、女性神を祀つた神社は幾らもありますが、皇后としてお祀り申してあるのは、たゞ神功皇后と昭憲皇太后との御二方だけで、しかも神功皇后が仲

哀天皇崩御の後を承けて、征戰にお從ひになつた男性的な方面をお祀りしてあるのに對して、昭憲皇太后は徹頭徹尾女性神として祀られてゐるのです。明治天皇が維新の偉業を御大成になつた聖德の高さは今更申すまでもありませんが、内にあつて宸襟を慰め奉り、いろいろと人知れず御心を配つて、宮廷の空氣を和やかにあそばしたばかりか、進んで各種の文化事業にお力を注がせられ、一般女性の自覺を喚び起して、その社會的位置をお高めになられた昭憲皇太后の文化的御功勳には、眞に平和の女神としてお讃へ申さねばならぬものがあります。明治神宮の御祭神として、この平和の女神をお祀り申してあるといふ事は、日本人の神社崇敬に新しい生命を注ぎこんだものであると思ひます。明治時代の女性の美點を御一身にお集めになつて、事ごとにそれを御發揮あそばされた御逸話は、口に、筆に、今も傳へられてゐますが、私は兩御祭神の數々の御神德を、また今更のやうに思ひ浮べながら、西神門から寶物殿へ向ひました。そして其所でもまた、明治天皇の御雄々しさに對して、昭憲皇太后の女性らしい典雅な御趣味と、お優しいお心づくしとを、御遺愛品の上に拜しました。明治天皇の御製の御草稿を昭憲皇太后が御筆記になつてあるのをも拜見しました。かういふものに對しますと、たとひ明治の天皇皇后は神去られましても、その御精神は永久に歴然と輝いて、私どもの行く手を御指導あそばされてゐるのだと心強く感じます。

北參道口を出ると、少しばかり雨が降つて來ましたが、アスファルト道がわづかにぬれる程度で、却つて快い氣持でした。振返つて見ますと、内苑の森にはうつすらと靄がかゝつて、名家の水彩畫を見るやうです。この内苑と外苑とをつなぐ裏參道は表參道よりもよい感じです。いはゆる名所に通有な土産物店などが一つもなくて、兩側を植樹帶の生き生きした新綠が彩つてゐるのも、神域から神域への路といふのにふさはしいと思ひます。

外苑では近代的庭園の明るさが、晴れやかに目立つて感じられます。何時しか

雨も晴れて、小雨に一入色増した、廣々と展開してゐる大芝生庭の緑を背景にして逍遙嬉戯する男も女も、大人も子供も、皆自由と快活とに充ちてゐるやうに見えます。明治天皇の御一生を謹寫した壁畫を以て飾られてゐる聖德記念繪畫館や、野球場、競技場、水泳場など、此所には私たちの心をひくものが多くありますが、私はこの外苑に近く接して、女子學習院の建つてゐるのを見て、殊に女子教育に御熱心であらせられた昭憲皇太后の御上にまた思を馳せました。青山口の傍にある兒童遊園では、大勢の幼兒たちが仲よく無邪氣に遊んでゐました。お優しい御祭神方も、きつと和やかな御微笑をたゝへられて、遙かに御覽あそばしてをられる事でせう。電車通へ出ると、もう町にはうつすらと、たそがれの色が漂うてゐました。（溝口白羊）

橿原宮奠都の詔

己未三月
日本書紀

我東に征きしより茲に六年になりぬ。皇天の威を賴りて凶徒就戮されぬ。邊土未だ清らず餘妖尚梗しと雖も、中洲之地復風塵なし。誠に宜しく皇都を恢廓め、大壯を規摹るべし。而るに、今運此の屯蒙に屬ひ、民の心朴素なり。巣に棲み穴に住む習俗惟れ常となれり。夫れ大人の制を立つるは、義必ず時に隨ふ。苟も民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。

且當に山林を披拂ひ、宮室を經營りて、恭みて寶位に臨み、以て、元元を鎮むべし。上は則ち乾靈の國を授けたまひし德に答へ、下は則ち皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と爲

むこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の奥區か。可治之。（日本書紀）

橿原宮奠都の詔について

紀元前二年三月二十日、はじめの天子さまである神武天皇さまは詔を下して仰せられるのに、

「われ、東の方へ向ひ、わるものどもを討たうと、日向の高千穗をでかけてから恰度六年になつた。先祖の神々の御助を受けて、賊どもを討ち平げられたけれども、少しはなれた國々には、まだ、わるいものがゐて安心が出來ないが、まんなかの大和地方は、先づ〳〵靜かになつた。そこで、これから、都を定めて宮を造りたいが、世の中が、まだ開けず、民の心すなほで、恰度巣に住み、穴に住んでゐるやうな風であるから、さほど立派な宮でなくてもよい。元來天子が、何事をするにも、必ず其の時と其の世のありさまとに合せてすべ

きである。

それで、なんでも、大御寶（國民を云ふ）の爲に、第一幸福になる事であつたなら、すべて天子たる務に、かなはぬ事はあるまい。

とにかく、山の林を切り開き、宮を作つて、謹んで天子の御位に即いて、わが寶である國民を、よく治め、そして天照大御神さまが、此の國を御授けあそばした思召に叶ふやうに、又、天孫瓊瓊杵尊が正しい道に依つて、國を治めなさつた御心を受け繼いで、だん〳〵大きく弘めたいものである。それで、民の住んでゐる處は、何處もなつかしい都のつもりでゐたなら、國と云ふ國は、どこの國でもみんな自分が治めてゐる家の内とおなじことであらう。

あの畝傍山の東南、橿原の地は、まあ國のまんなかで、あるであらうか。こゝに都をつくらう。」

と仰せられました。そこで、是月にそれ〴〵の受持の人々においひつけになつて、天子さまの御宮を造りはじめられました。（菟田茂丸）

日本の歴史は世界を家とする大規模の歴史である。
世界の長を採りて我が物とする大腹中の歴史である。
而して一切を綜合して世界無二の國體の結成、生長の歴史である。
而して所謂日本魂の住家である。

徳富蘇峰

倭姫命

五十鈴川の流清く、朝熊山の緑濃やかな所、皇大神宮の靈域常に神寂びて尊く、天照大神の御威德とこしへに我が國土を照させ給ふ。上は皇室より、下はすべての國民に至るまで、事ある時も、事なき時も、眞心を捧げて崇め敬ひ奉るこの神宮を、この地に始めて齋き參らせた御方は、抑々何方でいらせられるであらうか。それが、か弱い女性の御身でおはしました事を承るならば、誰しも深い感激に打たれて、おのづから我が身を省るであらう。

遠い神代の昔、天照大神は天孫瓊瓊杵尊をこの國に降し給ふ時、八咫鏡と、叢雲劍と、八坂瓊曲玉とを尊に授け給ひ、殊に御鏡を取つて「この鏡を視ること、なほ我を視るが如くせよ。」と仰せられた。それより後、御歴代の天皇は、三種の

神器を承繼いで、宮中にお祭り申し上げてをられたが、第十代崇神天皇の時、神鏡と神劍とを大和の笠縫邑に遷し奉り、宮を營んで崇敬の誠を盡されたのであつた。

第十一代垂仁天皇も敬神の御心厚くいらせられ、御即位の二十五年に「先帝はよく神を敬ひ祭り參らせ、己の身を責めて日々慎み給へり。こゝを以て百姓饒かにして、天下平かなり。朕の世にも神を敬ひ祭る事を怠るべきにあらず。」と詔せられて、皇女倭姫命を遣して、天照大神を祭らしめられた。命は仰を畏みて笠縫邑に赴き、身を清め心を淨くし、朝夕心を傾けて大神にお仕へ申し上げられた。そして大神の思召を受けて、とこしへに鎭座あらせらるべき宮所を求める爲、東の國々を巡られる事になつた。

それは交通の極めて不便な頃であつた。山には徑もなく、川には橋がなく、憩はうとしても茶店がなく、泊らうとしても旅館がなく、旅人は藁沓を穿いて險しい坂路を越え、しひの葉に盛つた餉に饑を凌ぎ、行暮れては、屢〻木の下蔭に安

からぬ一夜の夢を結ばねばならなかつた。その樣な田舍路に旅を重ねるのは並々の困難ではなかつた。まして皇女として宮中にお育ちあそばされた命に取つて、それは誠に恐れ多い次第であつた。

しかしながら、天照大神の思召に添ひ奉る御爲には、何事も大きな喜であつた。命は雄々しくも大和をお出ましになつて、近江を過ぎ、美濃を巡り、いづくとも定めぬ旅路をお續けになつた。ほそ〴〵と立昇る炊煙を目當にして、さゝやかな聚落にたどり著かれた事もあらせられたであらう。山の端に落ちかゝる月影を眺めながら、明日の行く手を思ひ煩はれた事もあらせられたであらう。あちらこちらを經巡つて伊勢に行かれた時、天照大神はお敎へあそばされた。

「神風の伊勢の國は、常世の浪の重浪歸する國なり。傍國の可怜國なり。この國に居らまく思ふ。」

と。この御敎は命の御心を朗かに浮立たせた。流淸き五十鈴川の邊、綠濃やかな朝熊山の麓、其所に木の香も爽かな神宮が營まれて、神鏡と神劍とは嚴かに奉安された。空は晴れて、梢をわたる風の音に限りなき祝福が溢れる。命の御顏もまた淸々しく拜せられた。

日は巡り月は移り、年はやうやく流れた。第十二代景行天皇の時、皇子日本武尊は詔を受けて、蝦夷を討つ爲に東國に下られ、先づ伊勢に至つて神宮を拜せられた。御姨倭姫命は、若く勇ましい尊の前途を祝し、大神に奏し上げて、叢雲の神劍をお授けあそばされた。尊の面は喜に輝き、神前に額づいて退出されたが、遠征功を奏して後、御歸路に於て悲しくも病に罹り給ひ、伊勢の能褒野でおかくれになり、神劍は尾張の熱田神宮に祭らせられる事となつた。二たび尊の雄姿を見る事の出來ないのを思うて、御姨命の歎き悲しまれた事は、お察し申し上げるにも餘りがある。

すべては遠い昔の物語となつてしまつてゐる。それより後、春風秋雨既に一千

九百餘年、神鏡は皇大神宮の正殿深く齋き祭られておはしまし、天照大神の神德は、いやが上にも灼然に我が國土を照させ給ふ。倭姫命もまた神域の近くに祭られ給ひて參拜する人々より、心からなる敬愛を受けていらせられる。あゝ、か弱い女性の御身を以て、尊い奉仕に御一生を捧げ給へる御事蹟を、誰か感激の胸をおさへて、仰ぎ奉らない者があらうか。（國文女學校用）

榊葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりける
まとゐせりける

神樂歌

弟橘媛

速風が速風を追うて、船を波頭に打ちつけながら吹き荒れた。その度ごとに、船が木の葉のやうに搖れては、波頭から波の底へ、打下される。

命の御船は已に荒れ狂ふ浪の眞中に漂つてゐた。勇猛な益荒男達もこの自然の暴力の前に、顏を掩うて倒れてゐた。海に慣れた水夫すら茫然としてせん術を知らなかつた。命はじつと空の一角を睨んで立つてゐられたが、怖を知らぬ御眼差にも、いつしか曇の影が見えて來た。

弟橘媛をめぐる侍女達の顏には、もう生きた色がない。前から、後から、左右から、のみならず頭上からまで、齒をむいてのしかゝる白浪の脅威に、おびえては伏しまろび泣き叫ぶ。

「取りみだすまいぞ。これしきのあらしに怖れて、見苦しい姿を見せまいぞ。」

弟橘媛は健氣にもかう言つて、泣き叫ぶ女達を制してゐられたが、その中に媛の顏が物凄い蒼みを帶びて來た。同時に媛の眼には固い決心の影が見えて來た。

「おゝ、これは海神の怒に觸れたとみえる。水夫舵取等の手練位で、どうならうものではない。殿下のお爲ぢや。お國の爲ぢや。この身を海神に捧げて、殿下の危難をお救ひ申さう。さうぢや、命を捨てるのは今である。さうぢや。」

弟橘媛はかう決心すると、よろめきながら命の御身近くへかけ寄られた。命は、たゞならぬ媛の樣子に屹となられて、

「おゝ媛。危い。なぜ騷がれる。今少しの辛抱ぢや。」

かう言ひながら、よろめきながら縋りつく媛の肩をしつかりと抱へられた。媛は命の御顏をじつと見て言はれた。

「命さま、一期の御願でございます。お暇を下さりませ。」

「何、一期の願ぢやと。そしてまた暇とは？」

「わたくしは殿下のお爲、お國の爲に命を捧げて、海神の怒をなだめたうございます。どうぞお許し下さりませ。」

「おゝ、身の爲にといふか！。國の爲に、健氣にも命を捨てるといふのか。」

命の御顏には見る〳〵悲痛の色が浮かんだ。命は暫く無言で、波をも風をも忘れたかの如く、じつと媛を抱きしめてゐられたが、やがて涙を拂つて、

「よう分つた。うれしく思ふぞ。帝のお國の爲ぢや、御身の健氣な決心は、我が一軍の命を救ふであらう。忍びかねるが、とゞめもえせぬ。ともかくも心のまゝぢや。」

弟橘媛の眼は喜に輝いた。やがて命の仰せによつて、荒波の上に菅疊八枚、皮疊八枚、絁疊八枚が敷き重ねられる。

媛は最後の思出に、鏡の前で裝を整へた。そして、底光を含んだ一聯の勾玉を眞白な頸に懸けると、侍女の一人が薄桃色の領巾を媛の肩に着せかけた。弟橘媛は、命の御姿をじつと見まもつてゐられたが、やがて美しい哀調がその唇を漏れた。

眞嶺さし　相模の小野に
燃ゆる火の　火中に立ちて
問ひし君はも

「空に冲つた富士を仰ぐ相模の小野の燒津が原で、燃えさかる火焔の中に立たせながら、御自身の危急をば顧みずに、媛はどうした、弟橘媛はいかにせしとお尋ね下さつた君なるものを！」といふ意味で、かう歌つて限りなき思ひをこめた名殘の眼ざしを命の御顏にそゝがれたが、やがて紅の裳裾が波間に飜ると、媛の姿は、菅の、皮の、絁の數々の疊と共に、見る見る浪間に沈んで、永久に人々の眼から消えて行つた。

「おゝ、媛君が、媛君さまが！」

「もう御見えにならない。もうあの荒波の底に！」

「益荒男も及ばぬ、健氣なお素振でござりまする。この尊い犧牲の御行には、あらぶる海神の怒も必ず和むことでござりませう。」

腰許達や益荒男達が、取り〴〵に悲哀驚歎の詞を繰返す間に、命はじつと目をつぶつて歸らぬ事の追憶に耽られた。

水夫等が努力の少時が過ぎると、彼等は俄かに檝の輕きを感じた。と見ると、山のやうな怒濤の大うねりが小さく小さくなつて來るではないか。空を仰ぐと、所々に雲切れがして、西日の光が美しくのぞいてゐるではないか。

舵取の掛聲は生氣を帶びて來た。水夫等は甦つたやうに立ち上つて海波征服の檝を操つた。兵士どもは疲勞の身を起して、また東夷討伐の希望に燃えた。

水夫等兵士等のざわめきに、命は怪訝の眼を開かれた。そして驚と喜と限りな

き感謝の念とを以て、靜まり行く海の波を、雲の切れ目からのぞく夕日の光を、望まれた。そして、

「媛が獻身の誠心が、あの厚く重つた雲を切り裂いたのぢゃ。海神の怒は鎭つた。悅べ人々、もう大切な朝命も無事に果されるぞ。」

鶴の御一聲に、全船すべてが生色を取りかへした。不安が刻々に去つて、希望はやがて彼等の心を領した。同時に雲脚が海の面から遠ざかつて、雲の切れ目から現れた空は、明るいその手を伸ばすやうに擴つて行つた。

「おゝ、空が晴れて行く。蒼い〳〵大空が見えわたる。」

「もう、船を神々が護つて下さる。これも尊い媛の誠心のお蔭ぢゃ。」

「おゝ、雲が飛ぶ。明るい空が擴つて行くわ。」

喜の聲があちこちに聞える中に、突然舵取の甲高(かんだか)い聲が聞えた。

「殿下さま。陸(くぬが)が見えます。たしかに上總でございます。もう一時の辛抱でございまする。」

「おゝ、陸が見えるといふか。どれ！」

命は立ち上られた。舳の方へ歩いて行かれた。そして弟橘媛の愛と至誠とが、海神を鎭め、全軍を救ひ、國の大事を助け成した偉大なる功業を、大きな胸いつぱいに偲びつゝ、刻刻に近づく陸を見つめられた。（碧瑠璃園）

昭憲皇太后御歌　弟橘媛

船の上に君をとゞめてたちばなのいまはと散りし心をぞおもふ

わたつみの神の心も泣きぬらん身を沈めたる君がまことに　小池道子

かぐはしき名こそ流るれ橘の其の實を浪に沈めてしより　牧野春恩

靜寛院宮

和宮様の御一代は、いかなる巧妙な小説家も恐らく書くことの出來ないほど、人生のいはゆる悲劇なるものを含んでをります。否寧ろ悲劇そのものであります。

そも〳〵宮様は、弘化三年閏五月十日、仁孝天皇の第八皇女として、その母方橋本邸にて御降誕遊ばされました。御母は權大納言橋本實久の息女で、經子と申し、後には觀行院と稱し、宮様に從つて東に下つた方であります。

かくて宮様は六歳の時に、有栖川宮に入門遊ばされ、てにをはを學ばせ給ひ、同時に、幟仁親王の御子熾仁親王と御婚約を結ばれました。

當時の時世は、申すまでもなく維新大改革の序幕で、尊皇攘夷論の最も流行した時節でありました。こゝに於て朝廷側も幕府側も、この日本の國家を平安に維

持してゆくには、朝廷と幕府とが合體するより他はないといふ意見で、こゝに公武合體論なるものが出て來たのであります。それには、まづ朝廷と幕府との間を親密にせねばならず、そのためには、將軍家に朝廷より皇女の御降嫁を願ふ他はないといふことになり、盛んにその運動が起つたのであります。

かくて萬延元年、和宮様御年十五の時に、京都所司代酒井忠義が、江戸老中からの奉書を奉つて、御降嫁を奏請いたしました。然るに、皇女を關東へ降嫁遊ばされるといふ事は、德川幕府始つて以來、否、溯つていへば、鎌倉幕府開設以來の事でありますので、孝明天皇は御許可あらせられなかつたのであります。そこで、忠義は關白九條尚忠について重ねて勅許を請願し、終には天皇の思召に從ひ、攘夷を實行するといふ條件まで持ち出して切願いたしました。

これ程までにも幕府が至誠を披瀝して勅許を願つたので、孝明天皇も今は致し方なしと思し召し給ひ、和宮様の御生母橋本觀行院の御弟橋本實麗をして、宮に

御降嫁をお勸めになりましたが、宮はたゞ一途に御上書をもつて御斷りを申し上げられました。

こゝに於て孝明天皇には、御妹たる宮からは不承知の御旨を言上され、江戸からはいかなる朝廷の御命令にも服從し奉るから是非ともと請願され、全く板挾みの姿とならせ給ひ、今は詮方なしとて、和宮様に代ふるに、皇女壽萬宮を以てせんとの聖慮を内示し給ふに至りました。壽萬宮は孝明天皇の皇女で、安政六年三月の御誕生でしたから漸く十七八箇月ぐらゐの御齡であります。まだ襁褓の中に在す姫宮を將軍に御降嫁とは、よく〳〵御困却の末に思し召し立たせられたことであります。かほどまでに孝明天皇が思ひ込ませ給うたに就いては、和宮様にも、もはやこの上は致し方がないと思し召し給うて、いよ〳〵御降嫁の命を奉ずる旨を奉答せられました。これが宮様の御年十五、萬延元年八月十五日の事であります。かくて文久元年十月二十日、宮様は京都御發輿、中山道を經て十一月十五日江戸御著、次いで十二月十一日には江戸城に御入輿、翌年二月十一日を以ていよ〳〵御婚儀を擧げさせられました。時に宮様は御年十七、十四代將軍家茂もまた十七歳でありました。

しかしながら宮様は、その夫とし給ふ將軍と御一緒にいらせられた期間は甚だ少かつたのであります。將軍は上洛の期間も數箇月に亙り、慶應元年五月よりは長州征伐のため、江戸を發して上方に滯在し、翌二年七月二十日二十一歳で終に大阪城中に逝きました。

されば短い結婚の生涯に猶短い家庭の樂しみを得、しかも御年二十一にして寡婦にならせられた宮様は、その年十二月十九日に御髮を薙り、靜寛院宮と稱せられました。しかも十二月二十五日には、杖とも柱とも頼み給うた孝明天皇も崩御遊ばされたのであります。宮様の御胸中はどんなでありましたらう。

その翌慶應三年には將軍慶喜の大政返上となり、その翌明治元年には伏見、鳥

羽の變が起り、つゞいて錦の御旗は堂々と關東を指して、官軍は東海道、中山道から攻め下つて來ました。

この時に於て、もし宮樣が尋常一樣の婦人であらせられたならば、何の造作もなく京都にお歸り遊ばされたでありませう。しかしながら、自分は既に先帝の勅命によつて、德川家の婦となつたのであるから、どこまでも、一身の安危を外にして德川家のために盡くさねばならぬといふ御誠心をもつて、宮樣はあらゆる事に御骨折り遊ばされました。

世間では江戸城の攻擊中止は、西鄕南洲、勝海舟の會見によつて定まつたものと申して居ります。眞にそれに相違ありませんが、もし東京市民が西鄕、勝等を自分等の恩人と思ふならば、私は、和宮樣をもまた東京の恩人と思はねばならぬと信じます。のみならず、朝廷が幕府に對して手厚く遊ばし、維新の歷史にまことに有難い光明を添へたのも、悉皆とはいへませんが、半ば宮樣の御歎願、おとりなしが與つて力あるものといふことが否定出來ぬのであります。

大なる事を成すのは、必ずしも大なる策士とか政治家とかいふ人ばかりではありません。苟も誠心あるものがその位置にあり、誠心に隨つて行つた事は、彼にも我にも普遍平等に幸福の結果をもたらすものであります。宮樣の事も即ちその通りであります。

かくて宮樣の御骨折によつて、德川家も駿河にて七十萬石を賜はり、德川龜之助(公爵家達)の相續も出來、すべての事が、宮樣のお願通りに落著しましたから、明治二年正月を以て、宮樣は東京を發し、京都にお歸り遊ばされましたが、明治七年、二十九歲の御時、また東京に御移轉になり、麻布の邸に御住居遊ばされました。そして明治十年八月、脚氣の御氣味にて箱根塔の澤に御轉地遊ばされ、九月二日終に薨去遊ばされました。御年三十二。御遺言によつて增上寺の昭德院廟所即ち家茂の廟所に葬り奉りました。

宮様の事に就いては、御日記があり、また御消息文もありますが、最もその御心を伺ふに足るものは御歌であります。御歌は一生お嗜みあつたものと見えて、御秀歌も少くないのでありますが、中にも御述懐の歌などには、何ともいへぬものがあります。例へば、

惜しまじな君と民とのためならば身はむさしのの露と消ゆとも

など、これが二十歳にまだ満ち給はぬ宮様の御歌であらうとは、誰も思ひ及ばぬところでありませう。

將軍家茂の薨去を悲しませ給うた御歌の中には、今なほ拜讀して斷腸の思の胸に迫つて來るものがあります。

三つせ川世に柵(しがらみ)のなかりせば君もろともに渡らましものを

世の中のうきてふ憂を身一つにとりあつめたる心地こそすれ

また御述懐の御詠に、

數ならぬ身こそつらけれかかる世も君が力になるよしもなき

今更に人をも世をも恨むまじ數ならぬ身をひとりかこたむ

といふのがあります。

實に宮様の御一生は悲劇でありました。そして宮様は、婦人の大切な貞操を完うし、己のために生活せず、他のもののために生活するといふ奉仕的精神、しかも哀しんで傷らず、恨んで傷らず、運命に忍従して、よく守るところを徹底し給うたことは、實に千古を貫ぬき、萬世に亙つて、我が大和民族の典型たる女性と申し上ぐべき御方のお一人であると信ずるのであります。（徳富蘇峰）

日章旗

我が日本帝國の國旗は、白地に日の丸なり。

今、日の丸の由來を考ふるに、往古、天皇の御旗に日月を章(しるし)とせられたることあり。また源平時代の武士は好んで之を扇面に畫がきたり。彼の那須與一が射たるもまた日の丸の扇なりき。後、德川氏の世に商船の旗章を朱の丸に定めたることは、今尙存在する御朱印船の圖を見て明らかにこれを知るべきなり。

德川家光、國を鎖してより、外國へ船を出さざることとなり、從つて朱の丸の旗章をも用ひざることとなりき。德川氏の末に至り、外國より續々と軍艦の來航せしかば、諸大名の中にもまた大船を造るもの次第に續出せり。その際、鹿兒島の島津齊彬(なりあきら)は、日本古來の歷史、日本の國號、その他旭日昇天の勢など種々に思

ひ合はせて、日の丸を我が國の旗章と定めんことを幕府に上書したり。かくて、幕府が大船には必ず白地に日の丸の旗を揭ぐべしと布告せられたるは、安政元年七月十一日のことなりき。

明治天皇の御代に至りては、また日の丸を以て國旗と定めらるゝこととなりたり。次いで陸軍旗・海軍旗も御定めありたるが、やはり日の丸を基として、光線を加へられたるものなり。

抑〻、國旗はその國の威力を表章するものなり。また一朝事ありて兵馬の間に立つときは、軍旗を以て直に元首と仰ぎ奉り、一身を捨てて戰ふべきものとす。國旗・軍旗は實にその國、その軍隊の生命ともいふべきものなり。されば國旗を定むるに於ては、世界列國皆それ〻の由緒と考案とを以てす。例へば米國の星、土耳古の月、暹羅の象の如きこれなり。固より各〻所由(いはれ)あることなれども、また非常に深き意味ありとも覺えず。唯我が國旗は、太陽を以て表象とするが故に、

その色と形との鮮明なるのみならず、その意義に於ても、また甚だ深遠なるものあり。

太陽は、我が地球及びその他種々の星を繫ぎて、太陽系と稱する一箇の團體を組織し、自らその中心となりて、地球、その他同系統の星を廻轉せしむるなり。また、太陽は熱と光との根源なり。この點よりして見れば、熱あるが爲に大氣は膨脹し、水は蒸發す。風もこれが爲に起り、雨もこれが爲に起るなり。石炭や石油を燃やし、或は水力電氣などを以て强烈なる熱を得るも、また太陽の熱を本とするものなり。更に一歩を進めて考ふるに、彼の闇を照らして光明を與ふるものは光なり。また草木の生育するも、繁茂するも、花咲き實を結ぶも、皆光と熱とのあるが爲なり。春となり秋となりて四季變化し、禽獸の繁殖する、蟄伏する、また光と熱との關係より來るものなり。かくの如く次第に擴めて考ふる時は、人間社會は勿論、地球上の萬物皆光熱によりて支配せらるゝを知るべく、若しこれなくば農・商・工業また存在すべからざるなり。

太陽の人間社會に與ふる勢力は、殆ど言語を絶するほどに廣大なるものなり。これを道德上の意味よりして考ふれば、智・仁・勇の三德は太陽に於て兼備へたるものといふべし。即ち闇に光明を與へて萬物を照らし、その黑白正邪を識別するは智なり。春光麗らかにして、草木を生育せしめ、花を開かしめ、夏秋の候に至り、果實を結ばしむるは仁なり。或は炎熱赫々として金を爍かし、或は烈風雷雨を起すが如きは勇なり。太陽は智・仁・勇を兼備へて、恩威並び行はるゝものといふべきなり。故に古より諸國民皆一樣にこれに對して崇敬の意を表したるが中にも、我が國にては特に皇祖天照大神を太陽に比し奉るを常とす。蓋し皇祖の神德の偉大なる、智・仁・勇三德を具備せられ、赫奕として光明を放たるゝ所、洵に能く太陽と相似たるを以てなり。されば皇祖嫡流の御子孫を「日の御子」といひ、皇位を「天津日嗣の御位」ともいへり。

かくの如く、我が日本人は太古よりして太陽に對し崇敬を極めたるものなれば、これを國旗の章として日本帝國の國力を天下に表明したり。これ我が國民が旭日昇天の勢を以て、世界に進み出づる姿とも見るべきなり。

皇室の御紋章たる菊も、花と見れば花なれど、またこれを太陽がその光を發射したる形とも見ることを得べし。香川景樹の歌に、

菊花第一

花といふ花の末には咲きぬれど上ににほはむ花なかりけり

と詠まれたる一首あり。作者は鎖國時代の人なるが故に、「四季の花にては梅・櫻・藤など次第に咲出でて最後に菊に至るも、菊のにほひは天下第一なり、この名花が我が皇室の御紋章たるは尊きことなり。」との意を歌はれたるものなるべし。然れども世界列國の相對立する今日よりして見れば、更にその意義を擴大せざるべからず。世人動もすれば、歐洲列國を指して先進文明國と呼ぶ。我が國は或點に於ては後進國たるを免れざらんも、結局は菊花第一といへるが如く、その國力、その文明、共に世界に冠絶するに至るべし。かくの如くこの歌の意を解して、御紋章を拜する時は、光明自ら發して、正に太陽に酷似せるを知るべし。

（杉浦重剛）

君がみいつはかくぞとばかり空に輝く日の光　（俚謠）
花の日本を上から見れば沖の白帆は舞ふ胡蝶　（俚謠）
昔は紅白いくさもしたが今は一致で日のみはた　（俚謠）

日本書紀通證より

其唯赫々日本、開闢以還、闔國之大賊不血刃而自斃、朶頤之凶徒不旋踵而授首。是以上未有敵國外患之虞。民不知放伐革命之權。泰然固磐石之宗、以獨立宇宙之間。是乃神明之風威、其誰不崇奉之耶。

八幡大神託宣曰、我國家開闢以來君臣定矣。以臣爲君未之有也。夫君臣者、三綱之第一、徹天地、亙古今而不可易也。猶子之不可以爲父、婦之不可以爲夫矣。此所以天柱一立而君君、臣臣不可容議其間也。（谷川士清）

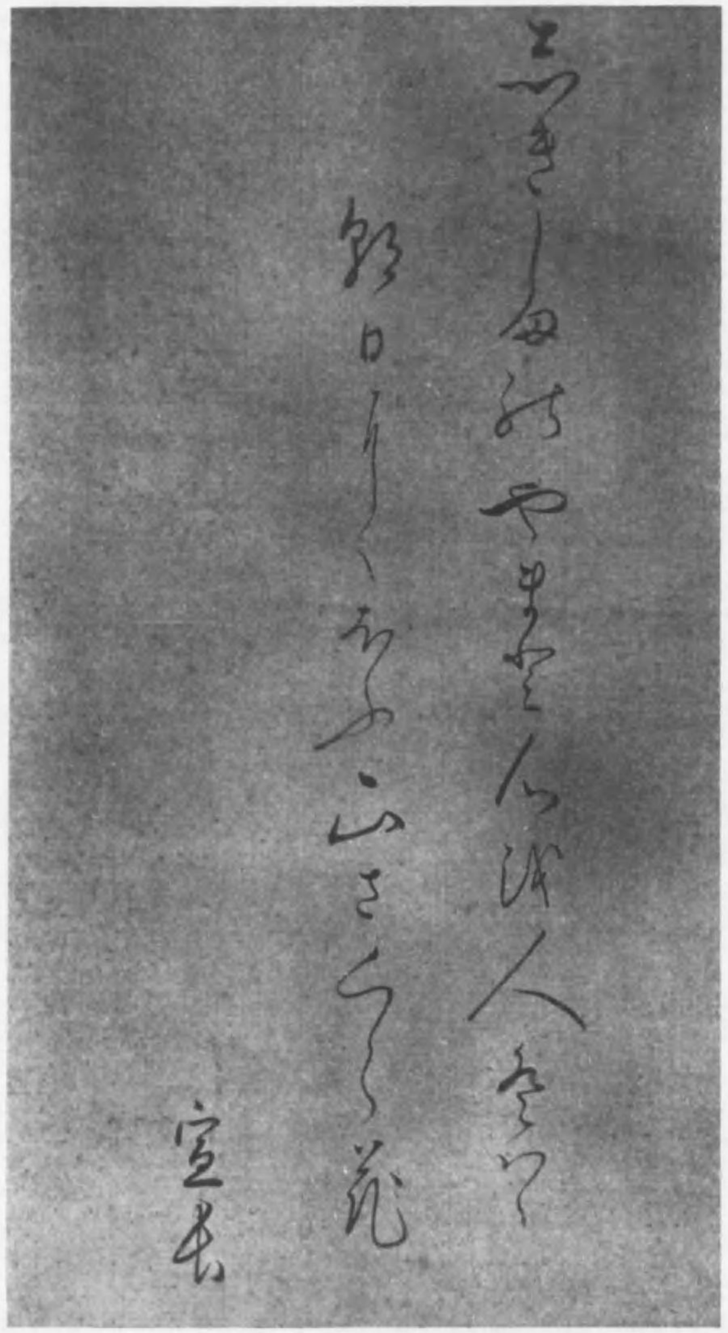
谷川士清の肖像と筆蹟

谷川士清の歌

神風や神代ふりにし五十鈴川常世の浪の音もゆたかに
うごきなき國は安國久かたの天の御柱立てそめしより
あふぐべし四方の外にもへだてなきこの日の本の國の光を
何ゆゑに碎きし身ぞと人とはばそれと答へん日本玉しひ
梅は江の南にきゝしもろこしもかゝるよし野の櫻やはある
かしこしな民の葉草の末までも君をし仰ぐ大和心は

神のめぐみ

上は位たかく、一國一郡をもしりて、多くの人を從へ、世の人にうやまはれ、萬ゆたかに樂しくてすぐし、下は飢ゑず食ひ、寒からず著、やすく家る。これら皆、君のめぐみ、先祖のめぐみ、父母のめぐみなる事はさるものにて、その本をたづぬれば、件の事どもより始め、世に有りとあるもろもろの事、みな神のみたまにあらずと云ふ事無し。しかれば、世にあらむ人、神を尊まではえあらぬ事なるを、平日になりぬる事は、さしも心にとめず、忘れをるならひにて、君のめぐみ、先祖のめぐみをもさしも思はず。もとより神の御たまなる事は、みな忘れはてて、思ひもやらぬは、いといとかしこく有るまじき事なり。一日も、食物無くば如何にせむ。衣物無くば如何にせむ。これを思はば、君のめぐみ、先祖父母のめぐみ



本居宣長の筆蹟

を常に忘るべきにあらず。然るを世の人、さる事をば知らず思はず、神をばただよそげに思ひ奉りて、たまたまさしあたりて祈る事などかなはねば、その神をうらみ奉りなどするは、いといとかたじけなき事なり。生れいづるより死ぬるまで、神の惠の中に居ながら、いささか心にかなはぬ事ありとても、これをうらみ奉るべき事かは。又祈る事きき給はねば、神は尊みてやく無き物のごと思ひなどするは、いかにぞや。かへすがへすも萬の事、ことごとく神のみたまなる事を、平日（つね）に忘るる事なくば、おのづから神の尊まではかなはぬ事を知るべし。たとへば百兩の金ほしき時に、人の九十九兩あたへて、一兩足らざるが如し。その與へたる人をば悅ぶべきか、恨むべきか。祈る事かなはねばとて、神をえう無き物にうらみ奉るは、九十九兩與へたらむ人を、えう無きものに思ひて恨むるが如し。九十九兩のめぐみを忘れて、今一兩あたへざるを恨むるは如何に。（本居宣長）

本居宣長の歌

物皆はかはりゆけども現神わが大君の御代はとこしへ
かしこきや皇御國はうまし國うら安のくに國の眞秀國
天の下國はおほけど神ろぎの生みなしませる大やしま國
民安く世をわたらひのいすゞ川そのみなかみの深き惠に
世々を經て國の光はます鏡かけてさづけし神の御末と
さし出づるこの日の本の光より高麗もろこしも春を知るらむ
涙のうへに出づる朝日もいせの海やうら〳〵かすむはつ春の空

明淨直

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、「明き淨き直き誠の心」といふ言葉がある。我等は此の「明き淨き直き心」が、日本人の性質の核となり中心となるものであると考へる。此の言葉は代々の詔勅に幾度も〳〵繰返されてゐる。然も重きを措いて繰返されてゐる。其の他、古事記・日本書紀・萬葉集などにも、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深く感じた事、大和民族に最も濃く最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて出たのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱せられる現實・光明・活動・向上・中庸・快活・忠孝・清廉・勇武・義俠・風雅などの諸性質は、概ね此の明淨直の三大性質を基本として說明されるらしく、殊に三種の神器が此の三大性質の標章として遺憾が

ないやうに思はれる。次に、抽象的ではあるが、一通り其の理由を説明しよう。

鏡の性は明で、其の德は玲瓏透徹に物を映ずる事である。日本人は鏡のやうな明き心で、正しく事物を觀た。故に、其の觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黑い物は黑いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、惡行を見ては敢然として排斥すると云ふ傾があつた。天照大神は鏡を齋きて、「我が大御前を見るが如くせよ。」と仰せられた。全國無數の神社には其の鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の言葉などに、明き心といふ語が澤山用ひられてゐる。是等は何れも此の性質が我が國民の心底に根深く植附けられてゐる證據であると思ふ。我が國民の中庸性・折衷性・調和性も、一面この根本性質の結果であらう。我が國には、政治・社會・宗教などの諸方面に亙つて、諸外國に見るやうな非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、又いつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて來たとする。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相爭ふが、頓て互にそれには道理も無理もある事を解すると、馬鹿らしくなつて、最早爭論が續けられなくなる。そこで、騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。萬事が此の通りである。僅かあれだけの騷亂で明治の維新を見たのも、平和の裡に憲法を得たのも、君臣・父子の親和も、萬世一系の國體も、一面皆「明」といふ基本的國民性の賜物ではあるまいか。馬上に天下を得た武將が文藝の奬勵に骨折るのも、群雄割據の亂世に陳中篝火の下で古今集を讀む武將のあるのも、同じく戰國時代に、「敵ぞとて何かは人の憎からん、同じ御國の同じ身なれば。」と詠んで、敵を同胞として愛した勇將のあるのも、武士が僧侶に親しみ僧侶が武士に盡くすのも、乃至さつぱりと腹を切るのも、一は事を見ることが明らかで、理に從ふことが流れるやうな根本性に因るのではあるまいか。大和民族は十字軍やフランス革命のやうな極端な狂言を演ずるには、餘りに心が明る過ぎる傾がある。我等は、日本人を公正といひ、理に鋭いといひ、感情の平

靜を保つといひ、何事をも受容れる胸懷の洞然たる人種であるといつた外人の批評は、強ちでたらめの空世辭ではないと思ふ。

清淨の德は玉に於て絶好の標章を得てゐる。淨と明とは似てゐるが同じではない。其の違ふ趣は、ちやうど鏡と玉との違ふ趣に似てゐる。汚穢・溷濁を忌む事は淨明ともに同樣であるが、淨はそれ以上に味はひのあり溫かみのある事を要する。例へば、鏡は空白で正しく物を映ずれば足りるが、玉は必ずしも空白で物を映ずることを要しないで、溫潤の光、圓融の相、澄澈の趣のあることを要するやうなものである。本來日本人は明らかに事物を看る長所を有するばかりでなく、外物を看るにも、自己を發表するにも、一種の味はひのある態度を具へてゐる。其の明は空白の明ではなくて、溫潤・圓融・澄澈の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくて、水晶・夜光珠の明である。我が國は、古來、禊・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞・宣命を始として、多くの歌詠・諷謠は明き心を現しながら、趣味・風韻に富んでゐる。然も其の趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文學に見るが如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなく、能く其の實を現し、中味に相應した修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戰陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は冑に香を焚きしめるといふやうな嗜があつた。上流社會は言ふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれにふさはしい文學を持つてゐる。外國出稼の勞働者が、其の日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬ者はなく、さうして、是は外國の勞働者に絶えて見ない所と言はれてゐる。大工・指物屋の手に成る果敢ない家具や細工物も、西洋の表面だけ美しくて裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えない裏面にまでも手を盡くすといふ嗜がある。是等は何れも大和民族が淸きを愛する根本性の現れたのではあるまいか。我等は「日本人は世界第一の審美眼を有する國民であつて、貴族から勞働者に至るまで皆美術を愛翫する。」といつた一外國人の批評が、必ずしも虛妄でないと信ずるの

である。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、また直前直往を意味する。其の厭ふ所は躊躇・緩慢・首鼠兩端である。曲ること、拗れること、邪なことである。叢雲劒は其の標章として此の上なくふさはしい。元來直の德の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するのにある。若し右の三德を一括して之を一體と見れば、明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は動的方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所を意が直進して實現する。さうして、知の見方、意の働き方に、潔くて言知らぬ味はひのあるのが、邦人固有の性格と言ふべきであらう。明き心を以て、「父母を見れば尊し、妻子見ればめぐし。」故に、其の明き心の示す所に從ひ、直前して父母に事へ、妻子を慈しむ。親を仰げば、「八隅しし大君」、「現つ神」として國に臨み給ふ樣が限りなく高く貴い。故に、直前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の獻身的奉公を致すのである。さうして、其の君父に事へ、妻

子を慈しむや、多くは水臭い思慮・分別・利害勘定等の結果でなく、眞實掬すべき趣があつた。こゝが眞淵・宣長等の國學者が感歎し自負して措かなかつた點である。無論、何處の國にも文化の進まぬ時代には、かやうな自然的の性向があつたであらうし、日本民族にも利害勘定的の行爲がなかつたとは言はれないであらう。また自然眞實の行爲に弊害が伴はないとも言はれないであらう。けれども、我が民族の特徴の一面は、とにかく此の點に存したやうに思はれる。其の例は遠い昔では素盞嗚命に見る事が出來る。あの日本武尊も素盞嗚命系の勇者である。次いでは鎭西八郎爲朝の、腕白・勘當・九國押領・召還、保元の勇戰、大島配流の一生、これも素盞嗚命系の大立者。是等いづれも向ふ見ずのやうでありながらも、妙に情に厚い所があり、君父の事とあれば水火も辭せずに直前するといふ風があつた。直・斷・決・勇の權化で、確に大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。其の他、蒙古來寇の時に西海の將士が身命を棄てて防戰した態度を見よ。代

々の武士が、「千よろづの軍なりとも言あげせず取りて來ぬべき男とぞ思ふ。」と云ふやうな斷乎たる覺悟を見よ。畠山重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に尊崇されるのを見よ。曾我五郎・朝比奈三郎の如き一徹者が國民に愛せられるのを見よ、豁然大悟の禪宗が盛に行はれたのを見よ。眞僞は知らないが、「正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に當る。」といふ戒が、天照大御神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には「七息思案」といふ格言があつて、分別も久しくすれば收る。武士は物事手取早くするものぞと云ふ事が、武士道の金誡になつてゐた。是等は何れも直を好む性質が、大和民族の心性の基本精髄をなしてゐる證據である。（五十嵐　力）

日本精神

今年の海軍記念日に、南鄕海軍少將から、日本海海戰の話を聽いた。此の戰爭に關する話は、幾度聽いても、必ず襟を正し涙を流さしめられるのであるが、それはその筈である。實に我が國土を賭してのあの仕事であり、而してそれには純粹に日本人たる氣持を發揮したのであるから、あの時の勝利の嬉しさは、忘れようとしたとて、忘れられるものではない。然し其の時には未だ深き感激を得るまでに生長して居なかつた人々、或は其の後に生れた人々は、其の當時の話を聽いても、どうも我々程には感興を起さない樣である。恰も古き歷史譚でも聽いて居る調子である。少將は丁度余と同年輩位で、其の時には一水雷艇長として軍に從事せられたとの事で、其の時の心持が如何にも余には切實に感ぜられた。少將の爲され

た詳細の事を茲に述べる必要はない。少將は其の話を結ぶに、東郷長官が根據地を出發せられるに際して、將士に訓示せられた語と、ロデイエストウエンスキー提督が、カムラン灣を出る時のものと、かのネルソンがトラフアルガーの戰に出動する際に「英國は汝等が汝等の義務を盡さんことを望む」と云うたのとを比較せられたので、余には更に感興を深くしたのである。ロ提督のものは、如何にもあはれな泣言の樣なものである。未だ戰はずして既に敗けたりと言ふ程に、意氣上らざるものである。今茲に論ずる價値はないのであるが、英國のものと比較することに於て、東郷長官のものは、如何にも日本的であり、それに對してネルソンのものが、如何にも英國民的特色を表明して居るのは、決して見遁してはならないのである。日本人に向うて、日本は汝等が汝等の義務を盡さんことを望む。といふ樣な訓示をしたとて、果して日本人的の純眞なる氣力を發し得るや否やは、實に疑はしいと余は思ふのである。神明の加護は努力奮勵するものゝ上にあり、然らざるものは神明の加護を受けるを得ずといふ樣な東郷長官のものこそ、古今を通じての日本人的生命であると考へる。さればこそ當時の勝利の報告には、いつも「神明の加護と陛下の御稜威により」といふ種の語が、如何にも純情として吐露されて居り、又事實凱旋の場合に於て、先づ錨を伊勢灣に投じ、全艦隊の將卒をして兩宮に參拜せしめ、然る後に堂々と東京灣へと向はれたのである。

又數年前の海軍記念日に、曩の世界大戰に於て、我が海軍が地中海に於て演じた仕事に關しての話を聽いたことがある。今は其の人の名も艦名や船名に就いても正確なる記憶がないから、或は間違つて居るかも知れぬから、讀者はそれを補うて置いてほしい、話の筋道には間違ひがないと思うて居る。即ち余は其の仕事が如何にも青年士官、而も日本人らしかつたかといふ點のみを考へしめられたのであるから、其の事を茲に記るせば足るのである。驅逐艦の槇と榊とが、英國が東方へ戰員殊に病院附人員の多數を送る所の大運送船ルシタニヤを護衛して行つた

時の出來事である。此の運送船が獨逸の潛航艇から見事一發を見舞はれた。其の時槇は直進してルシタニヤ號に横付けになつた。此の擧動は實は無謀であつた。否な無知の致す所であつたさうである。何故ならば潛航艇は斯る場合には時を見計つて、必ず第二發を發射すべきであるからである。果然第二發が來た。而してそれは槇の横腹に向つて來たのである。其の時には艇長は最早何の施す術もなく、實は口腔は乾いて、號令をすら發する事が出來なかつたのであるさうである。然るに天運なるかな、水雷は波の都合で、槇の船底を過ぎて、又ルシタニヤの横腹に命中爆發した。槇は破碎せられた人間や船材の雨をあびせられて、遂に退くの止むを得ざるに到らしめられた。すると僚艇の榊は又直ちに代つてルシタニヤに横付けになつたのである。此の前後の擧動に就て、敵艇は獨逸本國へ、死をも知らざる勇悍なる日本人よと報告して居る。又ルシタニヤに殘れる人々の狂喜嘆賞は言ふ迄もない事、英國は遂にあらゆる英國の驅逐艦を、日本人の手に委したいと申出てたのである。又其の後に槇であつたか榊であつたかが、水雷に擊たれて、殆ど艦體も乘員も其の半分を失うた時に、英國の某艇長は其の艇を捨つべしと忠告したのであつたが、日本の軍人は一名でも生き殘る間は、陛下の艦を捨てる事は出來ないと答へて、又深く彼をして感動せしめ、遂に其の艇を根據地迄引き來りて、復活せしめたとのことである。斯く外國人をして恐るべき日本人よと感ぜしめた所以のものは、純粹なる日本人的の精神である。而して其の結果は、各强國をして一種の恐怖心を抱かしめ、特に英米をして後に海軍縮小といふことを提案せしめるに到らしめる基となつたのである。

此の事に關聯して、茲に余は所謂學び得る所の知識と、根本的なる人の精神力といふものに就いて一言して置く必要を感ずる。艇長の話によれば、若し第二回の水雷發射が必ずあるものと知つて居たならば、あんなことは爲し得なかつたであらう。而して第二回の水雷が自分に向つて泳ぎ來るのを見た時には、實際は手

も足も出なかつたのであると言ふ。禪の公案にかう云ふのがある。世尊が或る説教の場合にだまつて花を拈ねられたら、迦葉尊者が獨り破顔微笑した。それで世尊釋迦は、「我に實相無相、涅槃妙心、微妙法門、不立文字、教外別傳あり、汝迦葉に授く。」といはれた。此が即ち禪宗の始を爲すのである。此の事に關して、其の時丁度迦葉が笑つたからよかつたが、若し笑はなかつたならば、禪宗はどうなつて居たであらうかといふのが公案である。過去の出來事は既に事實である。それに對して若し云々でありしならば、どうなつてゐたであらうと云ふ樣な、未來に關すべき可能性に就いて考へてはならぬ。それこそ空想説になるのである。其の場合にどうであつたにしても、結果は依然として日本の精神を發揮したにちがひないと信ずる。又左樣信ずることに於て、議論は正當に成立つのである。艇長は第二回の發射のあることを知らなかつたから、其の行爲に出でたのである。而して幸運にも第二回目の水雷が自分には命中しなかつたのでよかつたのであるが、若し其の幸運がなくて、英船の代りに自艦に命中した。—即ち無知なりし結果自分の艦も自分も失うたにした所で、—日本人は勇悍なり、日本の軍人は恐るべきものであると、英獨の人を思はしむる結果に就いては蓋し等しいのである。我等の目を付けなくてはならぬ點は實に此の點である。嘗て後三年の役に、雁の亂るゝを見て伏兵のあるを知り、其の用意をしたが爲に勝利を得た時に、源義家は、我兵法を大江匡房に學び置かざりしならば、蓋し危かりしならんと述懐せられた事がある。上記南郷少將も其の當時月光を如何に利用するかを知つてゐたが爲に、危くも敵の視界より免れ得たといふ話をもせられた。知は行はんが爲のものである。我等が學問をするのは、身を安全にし、計を密にする爲のものに相違ない。然し單なる上塗の知識や、暗記的のものが、咄嗟の場合に果して何になるであらうか。殊に戰爭の如き場合には、戰機軍機なるものがある。而して機とは概念の働きそのものであつて、其の機は單なる條件的の知識の得て握み得る所のもので

はない。再言すれば、知も我のものとなり居る。即ち我によつて運用せられて、始めて意義がある。我といふ力なくしての知識は却て邪魔になるのみ。即ち若し第二回目の發射が必ずあるといふことを知つてゐたならば、艇長はあの擧動には出なかつたであらう。然らば日本は一向重きを置かれなかつたであらう。軍縮問題も起されず、日本の外交官は一層安逸であり得たであらうとも考へられるのみの事である。實際上の事件にぶつつからないで、かれこれ云ふ戯論は、先づこんなものである。我等の與せざる所のものである。無知であつた、故に只守護の役目に突進した。而して水雷は我の船底を過ぎてルシタニヤに命中した。——實に我が義務に純なる所に神明の加護はある。天祐我にありと考へられる。——「日本は神國なり」の意味は實に茲にあるのである。故に我等は又信ずる。若し第二回發射といふ事を知つてゐたが爲に、其の擧に出でなかつたにした所が、あの精神さへあらば、何かの場合に同樣な結果を擧げ得たであらうと。（紀平正美）

日本民族の覺悟

日本民族の前途は洋々として希望に滿ちてをる。さうして、それは可能性である。此の可能性を實現するには、民族の各員の思慮と努力とを必要とする。單に日本民族の優越性を自負したり、外國民の言動を模倣したりするだけでは決して實現し得られない。日本民族の大使命を自覺し、其の遂行に向つて精進する事によつてだけ實現し得られる。

フイエは歐洲各民族に就いて考察して、最後に結論として、「未來はアングロ、サクソンの物でもなく、ドイツ人の物でもなく、ギリシヤ人の物でもなく、はたまたラテン人の物でもない、最も聰明で、勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである。」と言つてをる。日本民族の將來を思ふ者は、當に此の言を服膺す

べきである。

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、箇々人の相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。其の結果は、各民族とも新しい習慣、新しい信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在來の道德思想が權威を失ひ、人々の行動がまち〳〵になりがちである。是は現代の諸民族が經驗してをる所で、各國の指導者が其の頭を惱ましつゝある問題である。思想の混亂・不統一も、或場合には進歩の階梯となる事があるけれども、それが極端に走つて、一民族の傳統を破壞し去れば、其の民族は自滅する。

是は外國の文明に接觸する時に我等の心しなければならない所である。即ち傳統的な中心思想・中心感情を見失はないで、外來の思想なり感情なりをば、傳統的な物に磨きをかけて、それを精煉する材料とする心掛が必要である。今少しく外來思想に對する態度に就いて一言したい。

由來人には古い物を棄てて新しい物に就かうとする心の一面がある。其の好奇心を滿足せしめつゝ文化の發達に貢獻する意味で、新しい思想の研究をするのは惡いことではない。併し、如何なる思想でも、其の起るには相當な理由があることを忘れてはならぬ。かの勞農ロシヤの過激思想の如きは、ロシヤに於て始めて發達すべきものであらう。即ち時世後れの專制政治に對する反抗心の發露と見れば解釋がつくのである。また支那の一部に過激思想に共鳴する者のあるのは、彼等が元來利己的の民族であつて、國家或は人民の安寧幸福といふことの眼中にない者が多いからであらう。

總べて思想でも何でも新しいが故によいとは限らない。これに反して歷史は尊い。蓋し歷史は其の民族に適する思想の發現の跡であるからである。同樣に、風俗・習慣・道德・宗教等もまた其の民族に適するものが殘存した。此の明らかな事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは決して賢い仕方ではない。

曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。其の考によれば、澤庵のやうな滋養分のない消化の悪い物を食べてをれば國が亡びると言ふのである。然るに最近日本人の研究によれば、澤庵にはヴィタミンBを多く含んでをるから、澤庵を益〻多く食べよといふ事になつた。前の論者も徒に西洋かぶれをしないで、澤庵を長い間食べた日本人が強健に壽命を保つて來たことを考へたならば、あのやうな論は吐かなかつたであらう。西洋崇拜家の議論には兎角此の類のものが多い。たゞ我々の反省しなければならないのは、風俗や習慣などの中には、其の起る時には相當な理由があつても、時代を經過するに隨つて、其の理由は夙に消滅してをるのに、形ばかりが存續してをる事があるといふ事實である。其のやうな場合には、適當な形に之を改良する必要がある。併し些細な習慣でも、それを改變する時には、其の結果として如何なる影響があるかを先づ考へなければならぬ。些細な習慣の改變に對してすら、此のやうに愼重に考へなければならないのである。況や民族の中心思想に影響を及ぼすやうな思想を研究する者は、極めて愼重な態度を執らなければならぬ。

從來日本人が徒に外國人の行動を模倣して得々としてゐたのは苦々しい事であるが、それには大いに理由がある。其の原因を探して見るに大凡二つある。其の一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは日本の文化に就いての深い研究がなかつた事である。

西洋文明の特徴は主として自然科學の研究と其の應用とにあつて、目の前に容易に示される物である爲に、彼と此との差のある事が容易に分り、さうして是は從來日本に最も缺けてゐたのであつた。それ故に、西洋文明に始めて接觸した我等の先輩は、日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのである。さうして是は無理のない事である。其の後、自然科學の研究は其の進歩に於て殆ど底止する所がなく、一歩、否數十歩も後れてゐた日本人は、唯單に彼等のやつたあとに

追從して行くだけであつた。是が西洋崇拜の主な原因である。崇拜の結果は、一も二もなく凡べて彼等の行動はよいものと考へ、それを模倣する事が一日後れゝば一日時勢に後れるやうに思ひ、茲に模倣に對する競爭といふ珍現象を惹起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己を反省する事をしなかつたのである。

右のやうな情勢であつたから、其の自然の結果として、日本文化に特有な物があるや否やをさへ考へる者が少かつた。隨つて日本文化の精髓の如何なる物であるかに就いては、まだ多くの人々は之を知らない。それは一つは自然科學の研究を模倣する事に較べると著しく困難な事にもよるが、一部の人々を除いては、之を探究しようとする心さへも起さなかつたのである。さうして、其の結果として傳統的の中心思想をさへ失はうとしたのである。

併し、今や西洋文明の正體も略、明らかになり、心ある人々は内に自ら省みて、日本民族特有の文化に就いて之を明らかにしようとするやうになつたことは、誠に慶すべきことである。將來は、一方西洋文化もこれを研究しつゝ、然もそれに囚はれず、他方日本固有の文化に就いて今一層深く探究して、其の美點と缺點とを明らかにし、東西兩文明の融合に向つて大いに努力しなければならぬ。日本民族の大使命を果さうとするには、それだけの努力を惜しんではならない。

將來の大文明を荷なふ爲には、日本民族の努力すべき尙多くの事項があるであらうが、要は現實に即しつゝ高遠の理想を追求しなければならぬ事である。「長を採り短を補へ。」是は日本民族の傳統的精神である。此の精神を實現するには、西洋文明に就いて學ぶと共に、日本固有の文明に就いて一層深く究めて、其の善い點と悪い點とを明らかにしなければならぬ。

我等の力と使命とを自覺せよ。さうして、貧しい事を悲しむ事なく、努めて歡樂から遠ざかれ。「自己を愛する者は亡びる。」といふ訓言に聽け。

精神と共に身體を鍛へよ。心身の健全は日々の能率を增す資源であり、文化向上の資源である。

志を固く持て。忠孝一致・忠君愛國は古來一貫した日本民族の中心思想であり、大和魂である。如何なる學說にも我が民族に取つて之に優る思想はない。

教育の振興と產業の發達とは、國防の確立と共に民族發展の基礎である。各自其の適する所に就いて、各〻其の素質を發揮して、最高文明の生產といふ日本民族の大使命を完成せよ。

四海同胞主義は人類究極の理想である。日本民族の精神文化の宣揚によつて、世界人類を導いて協調の道程に上らしめなければならぬ。併し、正義は常に之を擁護する覺悟を必要とする。正義の戰に對する準備なき民族は、結局高遠の理想に達し得ない。事實に即しつゝ然も高遠の理想に向つて精進せよ。これ日本民族の大使命を果す唯一の條件である。（田中寬一）

楠公夫人

楠公夫人は名を久子といつて、當時の勤王の士、南江備前守正忠の妹で、嘉元二年甲辰の誕生である。正忠の館は金剛山の西麓甘南備（かんなび）の鄕、矢佐利の地にあつたが、正忠は文武に長けた武士で、子女の家庭の教訓も嚴格であるので、一鄕の崇敬を集めた。その正忠を兄とした久子夫人が、姿貌閑雅で、歌道に通じ、武技に達し、武家の婦女の典型といふべき人格を備へた淑女であつたことは、當然のことである。

一體、楠木家累代の居村といふのは、この甘南備から山谷二里をへだてた、赤坂村水分（みくまり）の地であつた。隨つて正成もこの地に生れたのであつた。八歲から十五歲までの八年間は、川上村の觀心寺中院に通つて文武の道を勵んだ。この間、南

江家の德聞を識つて、後に鄕士松尾某を介して、久子を迎へたのであつた。その時正成は三十歳、夫人は芳紀二十の淑女であつたのである。かくて楠木家の水分の邸に入つた夫人は、一意内助に盡くし、正中二年に正行を儲けたのを初めとして、和氣靄々の中に五子の母となつた。

しかるに、風雲は忽ちに平安城頭に捲起つて、その餘波はこの平和な家庭にまで襲うて來た。元弘元年、正成は突如として笠置の行宮に召されて優詔を賜はり、天顏に咫尺し奉つて勤王討賊の誓詞を奏した。かくて、赤坂城を築いて義擧に及んだが、同時に水分の邸を燒拂つて後顧の憂を絶ち、一家一族の兒女を擧げて觀心寺四十餘坊の中に入らしめた。夫人も、楠木家累代の菩提所である同寺の中院に遷つて、爾後夫正成が粉骨碎心の數年、五兒の教養に過したのである。

この間に、時局は變轉の限りを盡くしたが、南風はとこしへに地を拂つて、吉野の芳雪をいたづらに史上の恨と化するに至らしめた湊川の戰が來た。正成の籌謀は悉く斥けられて、今はただ一死奉公の外に途はない。建武二年五月、正成はこの覺悟をいだいて、海陸を掩うて來る賊軍を邀擊しようとして、櫻井驛に至つて清水某の家に宿した。明日の死をおもへば、家山のことがそゞろに胸に迫つて來る。正成は、一書を觀心寺に送つたが、その語に、

此度隼人儀、差下候事、別事にあらず、我等最後近日と覺え候。願はくは貴殿成長の後の器品をも見度候へども、義の重き遁れ難く候。彌勤學無怠、成長の後我等心中察せらるべく候。云々。

とあつた。字々誠忠の氣滿ちて、惻々人を動かすの概がある。

これを見た夫人は、直に十二歳の息子正行を促して、使者と共に急行、慈父の許に赴かせた。この場合に、赤誠滿紙の教訓を送つた正成の志もさることながら、少年を父の陣營に送つて、最後の遺訓を受けさせた夫人の貞烈と卓見とは、まことに感歎にたへない。

ここに於て、楠公父子の訣別は行はれた。生別・死別を兼ねた二公の當時の衷情は、悲涙滂沱たるものがある上に、遺訓諄々、千歳の芳事といふべきであるが、この芳事を成さしめて史上の花と咲かせた夫人の力も、亦考へずには居られない。夫人は實に四人の幼弟を膝下に列ねて、少年正行の口からこの遺訓を承け、一門一族を擧げて、報國盡忠の臍を固めさせたのである。

湊川での正成の死は、さすがに足利尊氏までも感歎させた。尊氏は、特に喜瀬川有隣をして、正成の首級を千早の城に送り屆けさせ、厚く弔意をのべるとともに、和泉・河内の地には一指も染めないと誓つたのである。正成の首級は、千早口で安間七郎と生池兵衛が受取り、觀心寺の久子夫人の許に持參した。悲歎の涙に暮れながらも、夫の首級に遇ふことの出來るのを喜んで、夫人は五子と共に、これを奥の一間の淨机に奉じた。一族郎黨悉く獻欷して、一人の仰ぎ見るものがない。この時である、突如として正行が自盡を遂げようとして、夫人の儼たる教誡を受けるに至つたのは。環堵の者は座をあげて正行の心情に泣き、夫人の凛乎たる訓言に感奮せざるを得なかつた。

延元元年四月、後醍醐天皇は、一旦京師に還幸あそばされたが、尊氏の不臣の心を察し給うて、再び吉野に遷幸になり、討北の事を謀らせられたので、楠木氏の一族は、急いで吉野の行宮に赴いた。しかるに尊氏は、正行に書を贈つて、

汝能く天皇を幽閉せば、授くるに近畿五國の守護職を以てせん。若し從はずば大兵を發して、汝の一族を滅却せん。

と甘言に加へるのに威壓を以てした。この賊心を見拔いた久子夫人は、大いに尊氏の驕慢を怒つて、正行に言ひつけて一書を裁し、和田正遠・恩地滿一の二人をして尊氏に答へさせた。

謹みて惠書を拜す。正行は孺子未だ大事を專決せず。未亡人、唯判官の遺言を守りて其の他を知らず。今は車駕南山に臨幸す。臣子の職、當に死を以て擁護す

べし。何の遑あつてか足下の命を受けん。且楠木氏、もと足下と私怨なし。然れども其の兵馬を嶮地に勞するを賜はば、則ち大義のある所、某等正行を扶けて、屍を轅門に暴すを得ん。

と。凛烈刺すが如き答書を見ては、尊氏もまた手の下しやうがなかつたのである。

この意氣は、どうして吉野の士風を振はせずにおかうか。楠木氏一族の誠忠は、忽ちに南朝の興起となつて、毎に尊氏の心腹の憂をなしたが、時運は再び遷つて復歸らず、正平三年の四條畷の激戰に、夫人はその芳烈の氣を以て養ひ育てた正行を忠死せしめた。時に正儀は二十歳、正秀は十八歳、正平は十六歳、朝成は僅かに十四歳であつたが、亡父・亡兄の遺志をついで勤王に從つた。が、河内・和泉を擧げて、賊軍の手に委ねるといふ悲運に陷つたのである。

こゝに至つて、久子夫人は遂に觀心寺を出て、甘南備の峯篠の山上に堂宇を營んで隱棲した。敗鏡尼といふ名は、その緇衣を纏うてからのもので、こゝにさびしく十六年の歳月を過した上で、正平十九年七月十六日、六十一の生涯を終つた。（織田完之）

楠の根をしづかに濡らす時雨かな　　蕪村

上毛野形名妻、勸其夫以奮義、遂得破虜而還。瓜生保母、不哀其子之戰歿、而激勵新田義治、杣山義旅、得賴以振。皆可謂女丈夫矣。北條時頼母、教以節儉、楠正行母、訓以君臣大義。二子皆能樹立。可不謂之賢乎。（大日本史烈女傳贊）

野村望東尼

われもまた同じ御國にうまれ來てやまと心のあらざらめやは

有合ふ筆と紙とを取上げると、少女は何の苦しむ色もなく、すら〳〵と美しくかう書流して、客の武士の前に差出した。しかし、その態度はどこまでも、天眞爛漫として、少しも才を誇るやうなけぶりはなかつた。

「ほう、これは〳〵――。」

客は紙を手に取つて、一二度口の中で讀返しながら、じつと少女の面を見守つた。鋭い目には何時しか涙がいつぱい溜つてゐた。

「けなげぢや、御庵主。」

彼は稍〻其所から離れて寫經をしてゐる五十歳餘りの老尼の方を振向いて言つ

た。

「このやうな覺悟が、なぜ六尺の男にないのでござらう。それさへあれば、この亂れた世の中を治めるのに、一年の暇もかゝり申すまい。」

と慨然とした。

「いや、さ程にお歎きなされまするな。そのお心はやがて天に通じないで何といたしませう。」

尼は筆を措いて、慰め顔に言つた。上品なうちに男まさりらしい凛凛しさが、眉の間にほの見えた。

「お清どの、その色紙を。」

と、少女から先刻の紙と筆とを受取ると、前の歌に續けてさら〳〵と認めた。

水莖の跡は舞ふやうに美しかつた。

たが身にもありとは知らで惑ふめり神のかたみのやまとだましひ

尼の名は野村望東と言つた。

かの女は筑前福岡の藩士浦野重兵衛の三女で、文化三年九月六日に、城下の厩後といふ所で生れた。生來才色兼備で茶の湯、琴、花、縫針をはじめ、女の道には何一つ暗い事はなかつたが、取分けて和歌は國學者の大隈言道に學んで、すぐれて堪能であつた。處女の鑑として、一藩の若侍たちの懇望の的であつたが、二十四の歳に、同藩の野村新三郎貞貫の人物を見こんで、自ら父に乞うてその後妻になつた。そしてよく先妻の三人の遺兒を愛育した。

夫と共に大隈言道の門に入つて和歌及び書を學んだのは天保三年で、京都では勤王の志士賴山陽が血を吐いて死んだ年であつた。新三郎貞貫も勤王の志の厚い士であつた。國學に秀でたかの女も、自然京都を尊ぶ志が深かつた。しかし、當時福岡藩は幕府方の勢が盛んであつたので、貞貫は早くも覺悟して、四十一歳で隱居し、城下から一里ほど離れた平尾村の山間に小さな庵を建て、其所に浮世の塵を避けて、ひたすら和歌の道を樂しんでゐた。そのうちに良人は歸らぬ旅へ立つて行つた。かの女はすぐに髮を切つて尼になつたが、その頃から勤王の志は愈、厚くなつた。前の名をお元と言つたので、その音を取つて望東尼と號したが、東を望むと二字を用ひたのは、取りも直さず明暮れ京都の事を忘れぬといふ心からであつた。

くれなゐの大和錦もいろ〳〵の絲まじへねば綾は織られず

文久元年の十一月に、望東尼は和宮の御降嫁の行列を拜まうとして京へ上つたが、途中海上で難風に遭つた爲期日に後れて、望を果さなかつた。しかし、諸國の勤王の志士たちと交を結ぶ事が出來た。そして右の歌を詠んだ。私情を棄てて、ただ尊王攘夷の大目的に盡さうとする心が優しい三十一文字になつたのである。

かくて翌年四月に再び故郷に歸つた。

江戸幕府の勢は日に〳〵衰へた。尊王と言ひ、攘夷と叫んで、日本國中は煮返る

やうに騒がしくなつた。そしてかの女の庵には平野國臣や西郷吉之助をはじめ、月形洗藏、鷹取養巴等の志士が絶えず往き來をして、かくまはれてゐた。今の武士もその一人であつた。それは長州の奇兵隊長高杉晉作その人であつた。

望東尼の許には、和歌の弟子で吉村千秋といふ侍の娘の清子といふ十四ばかりの少女がゐた。長州から落延びて、望東尼の庵にかくまはれてゐた晉作は、徒然の餘り、かの女が手習をしてゐる傍から、

「清子どの、御身も大和魂をおもちか。」

と、戯れるやうに尋ねた。と、清子は稍〻暫く晉作を見詰めてゐたが、すぐに前の

「われもまた」の歌を書いたのであつた。

裏山から靜かな鳥の聲が聞えた。

晉作はじつと二首の歌を見詰めた。うるんだ目から、やがて熱い一しづくがほろりと落ちた。

「お恥づかしう存ずる。」

と頭を垂れた。

わづか十四歳の少女や、六十歳に近い老尼の心にも、かうした強い雄々しい覺悟があるのに、いかに敵に追はれたとは言へ、大の男がをめ〳〵とかくまはれ忍んで、安閑とした日を送るのは、餘りに腑がひないと思はれた。

彼は「死なう。」と決心した。そして急に襟をかき合せて、尼の前に兩手をついた。

「お暇仕る。」

「え。」

「これまでの御芳志、改めてお禮申し上げまする。」

「して、此所を出て、いづれへお越しなされまするぞ。」

「本國長州へ。」

晉作はきつと言つた。そして今の心持を述べて、國へ歸つて同志を集め、斃れるまで俗論黨と戰ふつもりだと答へた。

「若し幸に勝つ事が出來申したら、それは御兩所のお志の賜と存じ申す。」

「では、立てつらねた劍の中へ。」

望東尼はじつと晉作を見詰めた。そして動かしがたい彼の決心を見て取つた。

「勇ましい御覺悟。斷じて行へば鬼神も道を避くるとやら。御勝利は疑ありますまい。」

「では、わがまゝを見遁して下さりまするか。」

「何の。」

尼は強く頭を横に振ると、手箱から一葉の短册を取出して、新しい筆に墨を含ませた。

をしからぬ命長かれさくら花雲居に咲かん春ぞ待つべき

「御餞別でござりまする。」

「重々のお志、その櫻花と散るまでも、胸に掛けて參るでござらう。」

晉作は短册を押戴いて、深く內懷にしまつた。

そのうちに清子は心得て、草鞋や笠を取出し、旅じたくを整へた。

「おさらばでござりまする。」

「御國の爲に命を惜しんで下さりませ。」

二人は垣根の所まで見送つた。と、其所の坂道の下から、一人の娘が息せき馳上つて來るのが見えた。

「尼樣一大事でござります。」

その娘は遠くからかう叫んだ。それは月形洗藏の妹の梅子であつた。

「おゝお梅樣、一大事とは何事でござりまする。」

望東尼ははつとして尋ねた。

「捕人が參ります。」

「え。」

「高杉様の討手ぢや。」

「や。」

三人はきつとなつた。

反對派の俗論黨では、その後、高杉の行方を一心に搜索してゐたが、漸く筑前領へ逃げこんだ事だけを突止めて、福岡藩へ捕縛方を賴んで來た。その頃すつかり幕府方になつてゐた福岡藩では、さつそく八方へ忍びの者を出して、やうやう望東尼の庵に隱れてゐる武士がそれである事を突止めた。そしてすぐに大勢の捕人を差向けようとした。すると、何くれとなく高杉の身の上を案じてゐる月形が、どうしてか運よくそれを聞出した。「すはこそ。」と思つたが、彼もやはり今はお尋ね者同樣な身であるので、妹の梅子にその事を言つて、急いで注進させたので

あつた。

「それはようお告げ下さりました。さもなくば、毒蛇の口へお立たせするところでありました。」

望東尼は兩手を合せて梅子を拜んだ。そして晉作を招いて何かさゝやくと、奥の一間へ連れて行つた。

「暫く御辛抱なさりませ。」

かの女はさう言つて、佛壇の下の引出から、何時の間に用意して置いたのか、穢い破れた百姓の野良著を取出して、手早く晉作に著せた。そして臺所から鍋墨を取つて來て、構はずにその頰に塗附けた。見る〳〵うちに穢いなりの百姓が一人出來上つた。大きなさむらひまげを崩して、手拭で頰被をさせると、清子や梅子にまでも、それが晉作だとは思はれぬやうになつた。

「さ、これで宜しうございます。」

尼は大小の代りに自分が祕藏の懷劍を贈つた。表へ出ると、ちやうど近所の植木屋の娘の子の四つばかりになるのが一人で遊びに來てゐた。「おゝ、なほよい。」と、尼はそれを見ると手を拍つて喜んだ。「よい子ぢや。お前、町のお祭を見たうはないかえ。」と抱上げた。無心の子は兩手を擧げて、「お祭、〳〵。」と叫んだ。

「さ、この子を負うて。」

尼は晉作にさう言つた。晉作は默つてその子を負うて外へ出た。後から梅子が白手拭を被つて、晉作の著物の包を持つて續いた。誰が見ても、この邊の百姓が、子供や妹を連れて城下へ出て行く姿としか見られなかつた。

二三町行くと、果して三四十人の捕人に出逢つた。晉作と梅子とは路の傍にしやがんでお辭儀をするやうな風をして、捕人をやり過した。誰一人怪しむ者はなかつた。虎口を遁れた二人は、飛ぶやうにして福岡へ走つた。

「御用だ。御用だつ。」

捕人はすぐに庵の八方を取卷いた。望東尼は平然として、寫經を續けてゐた。清子も和歌の手習に餘念なかつた。

「御用だつ。」

張合の拔けた捕人は、一段と聲を張上げて叫んだ。尼は靜かに顏を上げた。

「何御用でござりまする。」

「默れ。なみ〳〵の用ではない。長州の浪人高杉晉作をかくまうた覺えがあらう。」

と十手を振りかぶつた。

「ござりませぬ。三間とないこの庵、隈なくお探しなさりませ。」

尼は眉一つ動かさなかつた。

「むゝ、言ふにや及ぶ。」

捕人はすぐに間ごとに亂入して、押入は勿論、天井を破り、疊をはね、床を穿

つて見たが、既に逃れ出た晉作の姿のあらうはずはなかつた。

「むゝ、さては早くも逃したな。いづれへやつた。言へ。」

捕人の頭はすらりと刀を拔いて、尼の目の前に差出した。

「存じませぬ。」

尼はじろりと白刃を見た。しかし、顏色はやはり崩れなかつた。

「よし知つてゐようとて、一旦この身がかくまうたからは、骨が碎けて粉にならうとも、行先は言へませぬ。」

と、凛然と言放つた。雪を凌ぐ老松のやうな雄々しさに、捕人は思はずたじろいだ。そして、そらした目に清子を見附けた。

「ではそちは知つてゐよう。」

氷のやうな刃は、かの女の白い頰に觸れた。

「存じませぬ。」

「や。」

「尼樣さへ知られぬ事、何のわたしが知つてゐませう。」

少女は鈴のやうな朗かな優しい聲で答へた。しかし、微塵も搖がぬ魂は、三十人の捕人の氣を呑んでしまつた。

「むゝ。」と捕人どもは息を詰めて口惜しがつた。しかし、六十歲に近い老尼や、十四歲の少女を相手に太刀も振れないので、羽拔鳥のやうに、すご〳〵と城下へ歸つて行つた。

植木屋の娘の子は、その日のうちに綺麗な著物を着せられ、駕籠で送られて歸つて來た。（額田六福）

夫の一周忌に

ともすれば君がみけしきそこなひて叱られし世ぞ今はこひしき　（望東）

老女村岡

近衛公の老女村岡は實名を矩子と呼べり。洛西嵯峨の大覺寺の宮の家臣津崎氏が息女なり。幼きより公の大奥に宮づかへせられき。資性英邁俊秀にして淡白洒落、敢へて世の常の婦人の如く猜忌、嫉妬の心をさしはさむ等の事なく、君に事へては忠誠硬直にして、更に巧言令色の賤しき振舞無しと雖も、ことに寛裕・溫和其の諫むべきことも大抵譬喩・諷刺を以てし、笑談・嬉語の間に於て知らず識らず其の曲を去り正に就かしめんことをつとめられけり。斯かれば其の同僚及び配下に對するにも嚴にして溫、寛にして約、其の言行の善惡・邪正は能く洞察明知すと雖も、これを責め之を懲さんとする時には、決して苟くも爲すことなく、これを誡めこれを諭さんとするに當りても、能く物によそへ、事に譬へて丁寧親切に教へ導きたりしかば、其の下に立つ人みな女史が德を仰がざるもの無かりきとかや。

さても當時は尊攘の說やう〳〵盛んに行はれて、人の心も麻の如く亂れたる頃なりき。女史の主君たる近衛公は、夙くより勤皇の志深く在して、能く先帝の叡慮を贊け奉りたり。併しながら女史が、能くこれを內より助けて、常に四方勤皇の士を導き、巧に能く內外の氣脈を通じたるによれりといふ。斯くて女史は、公が夫人の生家なる薩摩公の臣西鄕隆盛、淸水寺の住職僧忍向等と交りて絕えず關東の動靜を伺ひ、又尊皇の志士に結びなどして、其の音信交際を益〻頻繁ならしめしかば、遂に幕府のために探知せられぬ。さるからに幕吏は官の逮捕狀を齎らし、老女村岡嫌疑の廉ありて關東に引致する旨を達し、突然女史を捕へたり。事萬一顯れなば斯かるべしと、豫て思ひ設けたる村岡は更に驚き恐るゝ體もなく、莞爾として捕吏に向ひ、「さても仰山なる人々の振舞かな。左樣に事々しく人騷がせし給はずとも、老いかゞまりたる嫗の何處へか逃げ隱れ申すべき。今仕度して

參らん程に、暫く爰に待ち給へ。御苦勞さまや。」と會釋して、急ぎ事の樣を君へも聞えあげ、且同僚にも暇乞して、「一寸往きて參らんを、宜しう賴みまゐらす。」とて、いそ〳〵と出て行きたるさま、恰も人の里歸りなどせんずる時のやうなりきと、女史が日頃の氣質知りたる人さへ其の膽勇に驚き感じけり。

村岡女史は、罪人の物すなる網乘物に身を搖られて立出づる門出にも、「我が身は朝家の屬僚、幕吏が私すべき者にあらず。況んや未だ其の罪の有り無し定まりたるにもあらぬを、何のために斯かる忌はしき物には召し乘せらるゝぞ。御身が逃げよと宣ふとも逃ぐるものにあらず。隱れよと宣ふとも何しに隱れ申すべき。たゞ通常の乘物して人一人二人附け候はゞ、あたら費用もいらざるべきに。」と言ひたりしかども、「幕府には幕府の掟ありて、我等が私に變更すべきにあらず。枉げて是に召されよ。」とありしかば、「御身がまに〳〵たるべし。御免あれ。」と挨拶して靜かに京を離れにけり。

斯くて東海道五十三次の驛路、名に聞きて見まく欲しける富士の嶺の雪、思ふこと無くて仰がましかば、いかに面白くも愛でたくも覺えぬべきを、虐政暴威を逞しうして罪無き罪に殺されつる幾多の人の上を思へば、我が身も亦淺間しき東の獄に、朝の露の消えを爭ふ命にもやと覺悟をしては、中々に憂しとも思はぬにや。此所は何といふ所で、彼所は何と呼べる邊りぞと、網乘物の裡より聲をかけて、さも、初旅路珍らしく、物見遊山に出でたつ人の樣に、物問ひかけらるゝ度毎に、警固の武士等は顏見合はせて、さても〳〵何處迄膽太き老女やらんと、驚き思はぬはなかりけり。斯くて日數經て江戸に到著したりしかば、例によりて頓て獄舍には繫がれたりしかど、こは五攝家の隨一たる近衞公が御內人なればとて、萬づに心をつけてけり。

さて數日の後、引かれて白洲に出でたりけるが、法官先づ口を開きて嚴かに詰問すらく、「薩摩の浪士西鄕隆盛、僧忍向等を手引きして、近衞公に謁見せしめたるは

汝の計らひか。將、公の仰か。露許りも隠す所なく、ありの儘に申したてよ。若しいさゝかにても其の實に違ふ事あらば、汝も亦重き罪免る可からず。」と云へりき。大抵の男子にてだに、當時の白洲に臨む時は、先づ其の事のありさまに膽を奪はるゝが常なり。況して左右に置き列べられたる拷具の數々、見るに目もくれ心消えて、答さへ前後を失ふが常なるに、女史は更に恐れ撓む所なく、端然として坐しつゝ、其の言の終るを待ち居たりしが、靜かに首を擧げて、屹と法官の顏を仰ぎ、「あら笑止や。御身達はなどてさる怖しき顏つきしてわらはを睨み給ふらん。年はも行かぬ者ならばこそ恐れもせめ。我等が如く老いし身に、何の願ひ、何の惜しかるべき事かあらん。あたら力瘤入れずとも、寛如と打ち解けて問ひ給はゞ、知りたる事は云ひもせん。答ふべきは答へもせん。されど云はじ、答へじと思ふ事は、よし縱令骨をひしがれ肉をけづらるとも、之こそは云はじ。答へもせじ。痴なる人や。」と冷笑せば、法官忽ち激怒して、「ひかへ召され。此所を何處とか思ふ。忝くも天下の法廷、若し事實を隠蔽して云はじとならば、云はせて見せん。女性と思ひて手ぬるく云へば、附け上りたる雜言容赦はならじ。」と、威を示して攻道具に眼をくばらせつゝ、拷問にかけんとの意を示せり。

村岡重ねてほゝと打ち笑ひ、「天下の御白洲、三歳兒にても知るものを、御身しか宣はゞ、わらはにも云ふ事あり。抑〻將軍家には日本の總追捕使征夷大將軍にて渡らせ給へば、げに武家の諸大小名及び其の屬僚に於てこそ、生殺與奪の權も在さめ。古より今に至る迄朝廷の御直臣及び其の臣屬をとりて私にこれを罪し、之を殺し給ふ可き掟やある。さるを濫に彼の朝臣を捕へて殺罰の制を施したる武門の輩、誰か一人も無道・不忠の名を後世に殘さゞる者か候ふべき。さればわらはにも疑はしく思召すよしありとも、まことは遠き東に召し下して、わざと尋ね給ふ可き理由なし。よし、それは暫くよしとすとも、問ふべき事は靜かに問はれてこそ、天晴其の職を盡さるゝものとは云はめ。萬一此の老嫗を拷問にかけても、

罪の顯はるゝ事なくして、脆くも死なば何と爲さるゝ。畏けれども將軍家は朝家に對して、其の罪の去り所無かるべし。死はもとより期する所、君を不德になし參らせても、御身が我意を張らんとならば、御身のまに〳〵し給へかし。」と答へて空嘯きたり。

女子に似氣なき大膽不敵に怖氣だちたる法官は忽ち面を和らげて、「否、そは御身が僻みにこそ。余は決して拷問せんとは云はず。只其の實を云はれよといふのみ。」と始めに變る甘言に、女史も面を和らげて、「それならば、始めよりさこそは宣ふべきものを、さらば申さん。妾が清水寺の住職僧忍向と親しく行きかひ、物語りもせしは、全く只年頃觀世音菩薩を信じ奉り、佛法に歸依するが爲に其の法話を聞きつるにて、又薩摩の浪人西鄕隆盛と交りしは、公が夫人の御生家なる舊藩士にて候からに、嘗て親しく音信せし名殘のみ。それすら今は何處にありとも知らずなりて、疎々しく過ぎ候ひしなり。ましてわらはが公に手引きして云々などゝは思ひもよらぬ事。申すも畏き事ながら、わらはが主公は一婦女子の口に說き動かされて、よし無き人に親しみ給ふが如き暗愚の君には在さずかし。これより外に再び申すべき事なし。」と云ふ事のさま理に當りて、更につけ入る可き隙も無かりき。

斯くて後尙幕吏は手を變へ、品を更へて尋問すること屢〻なりしかども、女史は敢へて口を開かず。死を決して主家に累を及ぼさゞらん事を勉め、且二人の上をも蔽ひて、更に云ふ所無かりしかば、幕吏もさすがに責めあぐみて、遂に放ち免してけり。

女史が白洲へ呼び出ださるゝ時は、いつも髮化粧麗しくして、露も亂れたる形無かりしかば、人怪しみて其の用意を問ひしに、女史答へて、「わらは老いしらへたりとも、女子の身にて候へば、死に臨まん時迄も、更に婦容を崩すべからず。故に都を出づる時、手早く旅用ひの小櫛一枚を襟の中へくけ込みて出でぬ。斯く

て毎朝獄吏が持て參る所の汁は、里芋の實なるが常なれば、其の粘りを取置きて髪のそそけを繕ひ候ひぬ。」と答へられたり。其の心しらひの行き屆きて、優にやさしき振舞に、人みな感じあへりきとぞ。

村岡女史、京師に還されたりし後、もとの如く再び近衛家に奉仕したりしかども、程なく職を辭して嵯峨に退き、直指庵を再興して、近衛家及び梅田雲濱、月照等の靈を祀り、かたはら詠歌を弄びて、悠々として其の餘生を送りにけり。文久二年春、野村望東尼筑紫より上りて、此の庵を訪ひし折、物議を憚り、障子越に一言二言交へしのみなりき。蓋し只管謹慎の意を表せるなり。

斯くて後、朝廷には、女史が維新新政の事に關はりつる國士等を助けて、隱に盡したる功寡からぬを賞せられ、終身の祿を給ひぬ。明治六年八十八歳といふ長壽を保ちて直指庵に永眠せられぬ。又明治二十五年にいたりて、更に從四位を贈られたり。（女子鑑）

甲冑堂

奥州白石の城下より一里半南に、才川といふ驛あり。此の才川の町はづれ、高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此の寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住せず、あき寺となり、本尊だに何方へとり納めしにや、寺には見えず。庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふもあまりあり。

此の寺中に又一つの小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書附には故將堂とあり。大いさ幾かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小堂の破損はいふまでもなし。やう〳〵に緣にあがり見るに、内に佛とても無く、只婦人の甲冑して長刀を持ちたる木像二つを安置せり。いかなる人のにやと尋ぬるに、佐藤嗣信・忠信二人の妻の像なりとか。

其の昔、義經鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、秀衡に暇乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我が子の嗣信・忠信をお供に出せり。其の後、義經京都へ攻め上り、平家を追ひ落し、一の谷・屋島等にてさばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來り給ひし時、初めつき從ひて出でたりし龜井・片岡など皆無事に歸國せしに、嗣信は屋島にて能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命を落し、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみなげきて、「無事に歸り來たる人を見るにつけて、せめては一人なりとも、此の人々のごとく歸りなば。」など泣き沈みぬるを、兄弟の妻女其の心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出で立ち、只今兄弟凱陣せしと、其の俤を學びて老母に見せ、其の心をなぐさめしとぞ。其の頃の人も二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、其の姿を木像にきざみて殘し置きしとなり。

嗚呼、兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其の人につれそひし婦人亦希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしきことなり。余此の物語を聞き、此の像を拜して、そゞろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあれはてたる小堂に、雨風をだに防ぎかねて、彩色も落ち失せ、僧だに守らで、香花を供する人も無く、年月に荒れ行き、つひにはあとかたもなくなりはてて、是等の事を語り傳ふる人もなくならんを、誰一人のあはれといひて、一錢の參物をだに供する人も無きは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覺えしかば、くはしく書き附けて歸れり。（橘南谿）

富田信高の室

阿濃津城主富田信高の夫人は浮田忠家の女なり。顔色雪の如く、勇力群に絶す。慶長五年家康の上杉景勝を征するや、信高從うて小山に抵る。會、石田三成兵を大阪に擧ぐると聞き、程を兼ねて阿濃津に馳せ歸る。分部政壽、古田重政之を援く。敵將毛利秀元、長曾我部元親三萬餘騎を率ゐて來り圍む。城兵纔かに千餘人。信高堅守して屈せず。敵兵益〻奮進し、終に外郭を破る。城中傳稱す、信高戰死すと。夫人大に悲みて曰く、我以て殉ずべきなりと。乃ち甲を擐、槍を揮うて突出し、秀元の騎將中村清左衛門を斃し、又十餘人を殺す。會〻、信高と逢ひ、與に兵を收めて城に入る。高野山僧來りて和議を勸むるに及び、信高城を開きて去る。家康信高の封二萬石を加へて七萬石とし、以て此の勞を賞す。

敵の火箭樓櫓に集中す。漠々たる黑烟忽ち半天に渦卷き騰る。

敵兵一擧して城を拔かんとす。濠を涉り、垣を攀ぢ、外郭を破りて侵入す。

信高殊死して戰ふ。敵を殺すこと算なし。本多志摩信高を諫めぬ。

「城將さに陷らんとす。徒らに雜兵を殺すも益なし。速かに自殺し給ふこそ然るべけれ。」

信高實にもと點頭けり。兵を收めて牙城に入らんとす。

秀元の騎將中村清左衛門斯くと見るより猛然として追ひ蹙る。信高勢危うし。殆ど獲へられんとして纔かに免がる。

されど敵の重圍に陷りて、脫せんとすれども能はず。信高勢茲に窮まれり。城中忽ち喧傳す。

「主公討たれ給へり。」と。

衆皆色を失ふ。

夫人聞いて驚き、且悲しむ。

「さらば君の御跡を慕ひ參らせん。」

忽ち甲を擐、馬に跨がり、門を開きて突出す。

と見れば、敵兵雲霞の如くに城兵を取卷けり。夫人槍を捻り、馬を飛ばして、驀地に敵の群中に突入す。

敵兵驚き恐れて披靡す。

清左衛門怒つて迎へ戰ふ。夫人槍を擧げて一突き突けば、清左衛門眞逆樣に馬上より落つ。

夫人は尙も馬を縱横に驅つて戰ふ。宛ら猛虎の群羊を驅るが如し。信高の圍忽ち解く。信高遙かに此の體を見て政壽に語りぬ。

「扨ても勇ましき戰振りかな。去るにても彼の美少年は何者にやあらん。分部殿、御邊の部下に候はずや。」

政壽は首を掉れり。

「否な、我が部下には候はず。おゝあの色の白さよ。正しく女將軍にこそ候べけれ。」

信高眸を凝らして望み見ぬ。忽ち馬を飛ばして近づき見れば、果して夫人浮田氏なり。信高驚いて聲を掛けぬ。

夫人は信高を見て喜び且泣く。

「おゝ、君にはそれに在しましかし。わらは君既に討たれ給へりと承り、君に殉ひ參らせんとて斯くは打つて出で候なり。今や敵少しく退き候ひぬ。いざ城に入り給へ。」

輿に兵を收めて城に入る。

敵復た追窮す。城兵拒ぎ戰うて死するもの五百八十人。

信高夫妻相見て黯然たり。

野史氏曰く、心貞なるものは行勇なり。夫人浮田氏の單騎衆敵に當り、以て其の夫を重圍中に救へるもの、これ其の勇の致す所、而して又其の貞の致す所ならずんばあらず。（熊田葦城）

藤堂和泉守教訓

一、御奉公之道油斷有間敷事

一、孝行之道忘却有間敷事

細川忠興の夫人

慶長五年、徳川家康、上杉景勝を攻めんとて關東に打向ふ。幕下の士皆從ふ。細川忠興も其の中にあり。時に、石田三成、豐臣秀頼を戴いて徳川氏を滅さんことを謀り、先づ人を細川邸に遣はして言はしめけるは、「今、世の中騒がしうて事穏かならず。夫人及び世子ともに城中に來らるべし。これ秀頼公の命なり。」と。夫人その家臣河北石見・小笠原秀清等を召して、「これ石田が謀とおぼゆるぞ。我等を質にして、關東從軍の士の心を飜さしめんとての策なるべし。我死すとも此處をば去らじ。此の旨返答すべし。」といふ。使者歸る。三成押返して迫る。又元の如く返事す。三成いよ〳〵怒る。夫人竊かに老臣を引きて言ふやう、「たとひ君の命なりとも、夫の許なくて、爭でか城中には入るべき。命に背きて刑罰

せられんことは固より覺悟せり。汝等能く此の旨を領せよ。」と。又曰く、「我今この命に違ひぬ。三成必ず兵を擧げて來り脅かさん。さては如何にとも術なからん。事急ならざる中に、信繁殿の後室には歳七十に餘り給へば、歩行不自由におはすべければ、忠隆の妻と共に避け奉らしむべし。」とて、やがて隣なる浮田秀家の邸へ遁れしむ。

夫人は更に霜といへる侍女を近く召寄せて、「今にも捕手來らば我は自殺すべし。汝は袋を頭に戴き、婢女の體をなし、館に炎上るを見て遁れ出でて、此の狀を我が君に申すべし。」とて、懷なる疊紙を取出し、傍なる硯引寄せて、

露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを

と書きて侍女に授く。侍女受取りて泣く。

さて小笠原・河北等を召して、障子越しに、「我が君は内府公に無二の忠良を盡したまひて、今東國におはしませり。其の出立たせ給ひし時、「如何なる事ありとも此の邸をな離れそ。」と、くれ〳〵も宣ひおかれける其の御詞、今耳に殘れるに、爭で此處をたやすく去りて、石田が術中に陷るべき。我先に離別せられし時、死ぬべき命ながらへて今日あるを致せるは、これ僥倖といふべし。今更に何の惜しきことかあらん。汝等たゞ我が最後を見屆けよ。斯く言へど、我決して秀頼公に背くにあらず。たとひ兵士寄せ來たりとも、ゆめ〳〵射向ふべからず。汝等よく計らへよ。」と懇にいふ。老臣等感泣して何の詞もなく、たゞ涙を呑みて退く。

夫人はやがて十歳になる男兒と八歳になる女兒とを招き寄せ、髪かきなでつゝ、「汝等よく母が言ふことを聞け。武士の家に生れては、死ぬべき時に死なざれば、却つて恥を蒙るものなり。今父君は軍にとて東方へおはしましぬ。其のおはさざるを知りて、敵兵あまた來りて、母と汝等とを捕へんとす。若し我等その手に捕はれなば、たゞに自らの恥のみならず、父君の御おもてふせとなるべし。如何に思ふか。」と言ふに、二人は互に顔見合せて、「我々今日まで永らへしは、たゞ母